

令和7年度
親子平和大使広島派遣事業
平和大使長崎派遣事業

飛び立とう

戦争のない青空へ

松 戸 市

目 次

<u>世界平和都市宣言</u>	1
---------------------------	---

親子平和大使広島派遣事業

事業概要	5
平和大使名簿、令和7年度親子平和大使広島派遣結団式 . . .	6
広島市訪問	7
松戸市戦没者追悼式	9
平和の集い	9
学校での発表	9

平和大使の報告

「平和大使として広島を訪れて」	にしおか あゆむ にしおか こうすけ 西岡 歩武、西岡 孝恭 . . 13
「ヒロシマ80回目の夏」	だいもん あおば だいもん かりん 大門 碧羽、大門 果林 . . 15
「広島原ばくドームへ行って」	くろだ ひまり くろだ さき 黒田 向日葵、黒田 咲 . . 18
「過ちをおかさず平和を作るには」	さとう まさき さとう たけし 佐藤 雅紀、佐藤 壮 . . 20
「平和大使として」	かさはら はるか かさはら ようこ 笠原 陽香、笠原 陽子 . . 23

広島平和宣言（令和7年8月6日）	27
----------------------------	----

平和大使長崎派遣事業

平和大使長崎派遣事業にあたって	31
平和大使の役割	32
平和大使長崎派遣募集要項	33
平和大使名簿	35
平和大使長崎派遣結団式・オリエンテーション	36
長崎市訪問	38
平和大使長崎派遣帰庁報告会	45

平和の集い	・・・・・・・・・・・・・・・・	46
-------	------------------	----

平和大使の報告

「未来へ承継する大切さ」	ねもと なつね 根本 夏寧	・・・・・・	49
「平和を未来につなぐために」	こばやし あい 小林 愛	・・・・・・	54
「感じた思いと込められた願い」	まつもと みお 松本 美桜	・・・・・・	57
「平和の尊さを未来に伝えていくには」	かなや 金谷 ゆら	・・・・・・	60
「平和大使長崎派遣報告書」	かなおか きお 金岡 季桜	・・・・・・	64
「平和大使に行って感じたこと」	にしやま えいし 西山 英志	・・・・・・	67
「長崎派遣を通して学んだこと」	ますみず さち 舩水 倅	・・・・・・	70
「平和大使長崎派遣を終えて」	なかやま ほのか 中山 穂乃香	・・・・・・	73
「平和への思い」	さくらい みづき 櫻井 美月	・・・・・・	77
「長崎での貴重な体験」	せきぐち はる 関口 晴	・・・・・・	82
「長崎平和大使の役目」	たちばな さら 橘 紗良	・・・・・・	85
「長崎を最後の被爆地へ」	しばざき もね 柴崎 百寧	・・・・・・	89
「平和大使長崎派遣レポート」	なかやま ゆう 中山 優生	・・・・・・	92
「私達にできること」	まつばら わかこ 松原 和佳子	・・・・・・	96
「昔と今、これからの使命」	いのうら はるか 井之浦 陽風	・・・・	101
「平和大使長崎派遣」	きたの つぐみ 北野 緒泉	・・・・・・	105
「命の大切さを伝える」	すずき たつなが 鈴木 辰長	・・・・	107
「伝えていくこと」	ただ にこなり 多田 和生	・・・・	112
「長崎で学んだこと」	つるまき るあ 釣巻 琉愛	・・・・	117
「長崎での体験を通して」	たけうち なお 竹内 奈生	・・・・	120
「平和への想い」	おおくぼ あさき 大久保 明咲	・・・・	123
「当たり前と思える贅沢さ」	よしの さくら 芳野 桜	・・・・・・	128

派遣後の活動について	・・・・・・・・・・・・・・・・	133
------------	------------------	-----

長崎平和宣言（令和7年8月9日）	・・・・・・・・・・・・・・・・	139
------------------	------------------	-----

歴代平和大使名簿	・・・・・・・・・・・・・・・・	147
----------	------------------	-----



～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

・ World Peace City Declaration

[英語]

March 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the “World Peace City”.

City of Matsudo

・ 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。 面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

令和7年度

親子平和大使広島派遣事業



～事業目的～

親子で、被爆地や被爆者に接することで、原爆の実相や平和の尊さを共に考えていただき、感じ・学んだものを家族や同級生、近隣の方など多くの方に伝えていただくこと。

～ 親子平和大使広島派遣募集要項 ～

【 平和大使とは 】

- ・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて、知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 対象 】

- ・市立小学校に在学する6年生の児童とその保護者で、以下の条件すべてに当てはまる人 ※保護者不在やその他やむをえない事情がある場合は、同居する成人でも応募可能
 - (1)戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があること
 - (2)事前研修、派遣、事後研修全てに参加できること
 - (3)学校での発表、平和の集いでの発表、その他の平和事業に協力できること

【 定員 】

- ・親子5組 10名 (申込者が定員を超える場合は抽選とします。)
同行者 : 添乗員1名

【 費用 】

- ・市の負担：東京駅から広島市までの往復交通運賃、宿泊代、広島市での移動運賃、8/20の朝食
- ・自己負担：東京駅までの往復、報告会会場(市内)までの交通費、8/19昼食・夕食、8/20の昼食など

【 申込方法 】

- ・松戸市オンライン申請システムにて申込

【 申込期限 】

- ・令和7年5月31日(土)まで

～ 親子平和大使広島派遣抽選会～

令和7年6月10日(火) 午後3時50分から実施

定員5組に対して24組の親子からご応募いただきました。

応募いただいた方のみが抽選の様を確認できるように YouTube 上に限定公開いたしました。

※1組辞退者が出たため、1組分の再抽選を行いました。

～ 平和大使名簿 ～

令和7年度 親子平和大使広島派遣 参加決定者一覧

学校名	児童氏名	保護者氏名
北部小学校	にしおか 西岡 あゆむ 歩武	にしおか 西岡 こうすけ 孝 恭
常盤平第三小学校	だいもん 大門 あおば 碧羽	だいもん 大門 か りん 果 林
寒風台小学校	くろだ 黒田 ひ ま り 向日葵	くろだ 黒田 さき 咲
新松戸南小学校	さとう 佐藤 まさ き 雅 紀	さとう 佐藤 たけし 壮
新松戸西小学校	かさはら 笠原 はる か 陽 香	かさはら 笠原 ようこ 陽子

～ 令和7年度 親子平和大使広島派遣結団式～

結団式では応募総数24組から抽選で選ばれた親子平和大使5組10名に任命証が交付され、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。



7月6日（日） 市役所議会棟3階特別委員会室にて

～広島市訪問～（8月19日）

日	8月19日（火）【1日目】	
行程表	8:30 東京駅に集合 【集合場所】 中央地下1階コンコース 八重洲地下中央改札内 「銀の鈴広場」	↓徒歩移動・5分 15:55～16:10 原爆の子の像・広島平和都市記念碑見学 （所要時間：約15分）
	9:00 東京駅出発 のぞみ125号 （※昼食は各自で用意）	↓徒歩移動・5分
	12:56 広島駅到着 広島電鉄へ移動	16:15～16:45 ・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館見学 （所要時間：約30分）
	13:11 広島電鉄1号線 広島港・宇品行	↓徒歩移動・10分
	13:29 中電前駅 13:33 ホテルマイステイズ広島着	16:55 宿泊ホテル到着・解散 （※夕食は各自で用意）
	13:55 ホテルに荷物を預け、広島市 平和記念公園に移動	
	14:00 広島市平和記念公園到着	
	14:10 広島市平和記念公園 レストハウス到着	
	14:30 広島市平和記念公園レストハウス 到着 PEACE PARK TOUR VR(たびまちゲート 広島)体験終了後レストハウス貸し会議 室にて振り返り（所要時間：約80分）	

19日は広島平和記念公園を移動しながら、VR体験を通じて被爆当時の状況を学びました。また、ほかにも原爆の子の像・広島平和都市記念碑や国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学しました。



～広島市訪問～（８月２０日）

日	８月２０日（水）【２日目】	
行程表	8:30 朝食後（ホテル） ホテルロビーに集合	
	8:35 広島平和記念資料館到着	
	8:45～10:55 広島平和記念資料館見学 （所要時間：約 130 分）	
	展示観覧（音声ガイドあり）約 70 分	
	被爆者体験伝承者講話 約 60 分	
	↓徒歩移動・10 分	
	11:05～11:10・旧日本銀行広島支店 （所要時間：約 5 分※外観を見学）	
	↓徒歩移動・5 分	
	11:15～11:45・袋町小学校平和資料館 （所要時間：約 30 分）	
	11:50 広島駅へ出発	
	12:10 広島駅到着	
	13:03 広島駅出発 のぞみ 96 （※昼食は各自で用意）	
	16:57 東京駅到着	
	17:00 解散	

２０日は広島平和記念資料館見学や被爆者体験伝承講話、袋町小学校平和資料館など、施設を見学しました。前日のVRで体験したものを思い浮かべながら、より深めて見学することができました。



～ 松戸市戦没者追悼式～

9月27日（土）

壇上にあがり、献花を行いました。

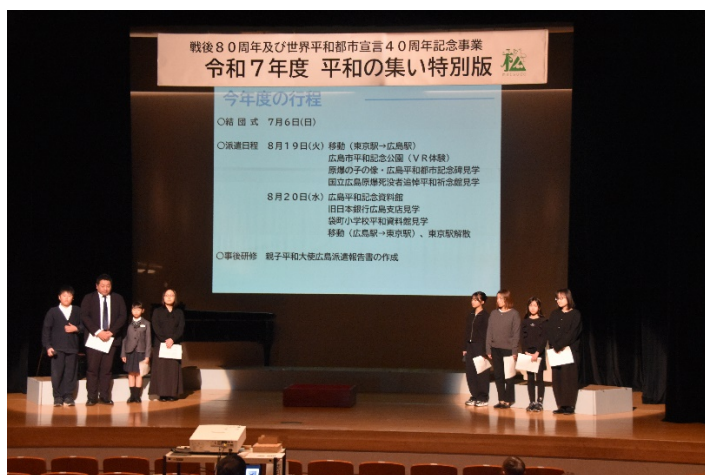


～ 平和の集い ～

11月30日（日）

◆親子平和大使広島派遣報告会（市民劇場にて）

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、広島派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。



～ 学校での発表 ～

北部小学校 西岡 歩武

9月30日（火）

全校朝会にて発表



平和大使の報告



平和大使として広島を訪れて

松戸市立北部小学校

西岡 歩武

西岡 孝恭

親子平和大使として派遣させていただきました。
広島を訪問するのは初めてで、また戦
後80年の節目とも重なり、改めて学ぶことが
たくさんありました。

平和記念公園はとてもきれいでした。ここ
が爆心地付近だとは到底感じることはありません
でしたが、公園内にたたずむ原爆ドーム
の姿がとても印象強く、この場所におきた事
実を現在まで伝えていると感じました。その
他にも平和記念公園付近に残っている、被害
を乗り越えた建物を複数見学させていただきました。

平和記念資料館では、当時ここで起きた現
実が展示されていて、親子共に言葉を失う程
でした。目を背けたいくなるような展示品や、
耳をふさぎたいくなる経験談をまのあたりにし

ました。また被爆体験記を聞き、原爆の脅威
や戦争の悲惨さを改めて考える事が、私たち
戦争を知らない世代にはとても深い学びだ、
たと思います。

ある被爆者の方のお話で、「今を当たり前
と思わない」、「いきなり戦争にはならない、
あの戦争と今はつながっている」、「核兵器と
平和は共存しえない」など、とても印象深く
私の心に残っています。

戦争は絶対にしてはいけないと誰もが思っ
ている事ですが、世界では今も戦争が続いて
います。この日本でも、いつ戦争が起きるか
わかりません。戦争は絶対にやめて欲しいと
思うからこそ、経験した事を周りの大人や友
達にも伝える事で、私も意識していきたいと
思います。

「安らかに眠って下さい、過ちは繰返しま
せぬから」

世界がいつまでも平和でありますように。

ヒロシマ80回目の夏

常盤平第三小学校

大門 碧羽

大門 果林

私は4年生のころから戦争について興味があり色々と学んできました。

地上で戦わないで飛行機から爆弾を落とすなんてひきょうだと思いました。抵抗することもできず顔も知らない人に殺される。

そして原爆はた。た1つの爆弾で町ひとつ分の命が失われました。今回平和大使に選ばれ広島に行き原爆についていろいろなことを実際に見て学ぶことができました。

特に印象に残ったことは現地のガイドの人からの話しです。原爆投下のVR体験では、緑豊かな平和記念公園からは想像もできない中島地区だった頃の様子を現在と1945年と見比べることができました。原爆投下の様子もVRで体験できました。前ぶれもなく原爆が落ちてきて一瞬で真っ白に光りました。

次に見えたのは暗い世界と焼けた人苦しんでいる人たちでした。どこを向いても火事。黒い雨も降ってきました。

そんな中でも生き残った人もいました。良かったと思っただけその後PTSDや差別で苦しみ今でも後障害のガンを何度もくりかえし苦しんでいるそうです。80年前の苦しみがまだ続いているなんておどろきでした。

胎内被爆、遺伝的影響についても調査が続いているそうです。

核兵器は恐ろしい、なくなればいいのにと思いますが、核兵器はなくなりません。

「あの国を攻撃したら核兵器で仕返しされるのでやめよう」という核抑止論という考えがらです。

どうすれば核兵器がなくなるのか？

世界中が協力してと言いますが私のクラス32人でさえなかなか意見がまとまらないのに世界中の人たちの意見がまとまるはずはないと思います。

私にできることは、広島や長崎の原爆のお
そろしさを伝えていくことだと思いました。
二度とこのような戦争が起こらないことを
願います。

広島県原はくドームへ行って

寒風台小学校

黒田 向日葵

黒田 咲

私は今回親子平和大使に参加しました。

8月19、20日に母と2人で広島に行き、自分の目で見て感じ、とても貴重な体験をしました。

私の誕生日は、2013年8月15日です。

小さいころから終戦記念日に生まれたという

ことで、親から聞いたり戦争のことをテレビなど

でもやっていましたが、具体的にどのような

ことが起きたかはよく知りませんでした。

今回広島に行き、みて原はくを落とされて

一瞬間のうちに約14万人もの命がうばわ

れてしまふことを初めて知りしよるげきを

受けました。現地で当時の映像を見たり、写

真やひばくにあつた人が身に着けていた私物

や洋服がてん示されていて、当時のひさんさ

や苦しみを感じふねがいたくなりました。

私が今回最も印象に残るものは2つありま

す。1つ目は、原はく資料館で見た畑村タケ代さんのワニピースです。ばく心地からの距離1900mにいたタケ代さんは、当時41才でした。広島駅で電車を待っている時にひばくにあっけました。ワニピースは黒く焼けこげ、ボロボロになりひさんな状況でした。タケ代さんだけでなく多くの人が被害にあいました。その中でも私と年れいが変わらない子や私より小さい子がひばくまたは亡くなってしまうていて心がいたくなりました。

2つ目は、ガイドの方と原はくドームを見た時に、実際原はくが投下され、被害にあった場所の映像が映し出されていたことです。80年前にこの場所でそのような悲んなことがあったと思うと不思議でした。

原はくドームへ行くと、平和はあたりまえではないことを知り、このような悲んなことが起きないように何か自分たちにもできることがあったら見つけたいです。またみんなにも伝えていきたいと思います。

過ちをおかさず平和を作るには

新松戸南小学校

佐藤 雅紀

佐藤 壮

ぼくは広島でたくさんのおのを見て学んできました。

中でも原爆資料館では原爆を落とされた時の広島の様子がいんしょうに残りました。最初は恐怖で当時の様子を想像することすら難しか、たのですが、だんだんとその恐怖が強い怒りに変わっていました。

広島派遣に行った後、いづも通っているじゅく先生と原爆や当時の戦争またその前後の話しをしました。その話しでも怒りがあいてきました。短期間でこんな強い怒りを感じたのは人生初かもしれません。

当時戦争をしていた人たち、「こんなことをしてなんの意味があるんですか」と直接聞いています。

日本にもアメリカにも、戦争をしたのは色々

20 × 20

な理由があったと思います。けれども、やっぱり戦争は、大きな過ちだと思います。原爆死没者慰霊碑には、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませぬから」と書いてあります。この過ちとは、戦争、核兵器など大人数の人間を犠牲にしてきたものだと思います。過ちをおかすず、この約束を守るためには、思ったことを全て口にしなさい、たかるといって全てがまんするのひけなく、言わなければならぬこと、言わぬ人でも良いこと、がまんしななければならぬこと、がまんなくこそよいことをし、ガリとみえあめ、けじめをつけて、考えを実行すれば、この世は、前よりも今よりも、もっとも、とずっと平和で明るくなり必ずこの約束は果たせると思っています。たかみなさんも、私たち人間がふいーも、という「想像力」で、どうすればこの約束を果たしこの世が平和で明るくなるかを考え、

実行してみようか？

平和大使として

新松戸西小学校

笠原 陽香

笠原 陽子

広島を訪ねられるのは親子共に初めてでした。

いつか子供を連れて訪問したいと思っていましたので願いが叶って嬉しく思います。

訪問の前は、原爆が落とされた後の惨状と子供が受け止められるか不安もありましたが学校の授業で見聞きしていたこともあり、目を逸らさず学んでいた姿が印象的でした。

特に、VRゴーグルを使って、爆発の瞬間・火災・竜巻の発生・黒い雨など8月6日の様子の映像を見ながら説明を聞いたことで、現実には起きたこととしてより受け止められるようになりました。突然奪われた余りにも大勢の命・被爆によって長い期間苦しみを強いられました。たくさんの方・そしてその苦しみは今でも続いていること、核兵器は絶対に許してはいけないとの思いが込み上げてきました。

鉄を溶かすほどの熱線、衝撃波により倒壊した建物、当時のまま残っている原爆ドームを見て原爆の威力を子供も感じ取ったようである。また、この時代子供が学校に行かず戦争のための労働をさせられていたことにも驚いたようである。今の生活のありがたみを感じたのだと思います。戦争にいつの間にか巻き込まれていた、待っているだけではいけない、「創る平和」という言葉が心に残りました。戦争を始め原爆を投下したのも人間。助けようと広島に駆けつけ見事に復興を成し遂げたのも人間。両方の命を持つ私達が平和を創り出して行く努力をしていかなければならないと思います。海外からもたくさんの方が平和記念公園に来ていました。この思いを少しでも広げていくことがつらい体験を後世に残してくれた方々へ報いることで私達にできることだと思います。これから平和大使との気持ちを持ち続けて行きたいと思います。このような機会をいただいたことに感謝いたします。

20 × 20

広島平和宣言

平和宣言

今から 80 年前、男女の区別もつかぬ遺体であふれかえっていたこの広島の街で、体中にガラスの破片が突き刺さる傷を負いながらも、自らの手により父を茶毘に付した被爆者がいました。「死んでもいいから水を飲ませて下さい！」と声を振り絞る少女に水をあげなかったことを悔やみ、核兵器廃絶を叫び続けることが原爆犠牲者へのせめてもの償いだと自分に言い聞かせる被爆者。原爆に遭っていることを理由に相手の親から結婚を反対され、独身のまま生涯を終えた被爆者もいました。

そして核兵器のない平和な世界を創るためには、たとえ自分の意見と反対の人がいてもまずは話をしてみることが大事であり、決してあきらめない「ネバーギブアップ」の精神を若い世代へ伝え続けた被爆者。こうした被爆者の体験に基づく貴重な平和への思いを伝えていくことが、ますます大切になっています。

しかしながら、米国とロシアが世界の核弾頭の約 9 割を保有し続け、またロシアによるウクライナ侵攻や混迷を極める中東情勢を背景に、世界中で軍備増強の動きが加速しています。各国の為政者の中では、こうした現状に強くとらわれ、「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない。」という考え方が強まりつつあります。こうした事態は、国際社会が過去の悲惨な歴史から得た教訓を無にすると同時に、これまで築き上げてきた平和構築のための枠組みを大きく揺るがすものです。

このような国家が中心となる世界情勢にあっても、私たち市民は決してあきらめることなく、真に平和な世界の実現に向けて、核兵器廃絶への思いを市民社会の総意にしていかなければなりません。そのために、次代を担う若い世代には、軍事費や安全保障、さらには核兵器のあり方は、自分たちの将来に非人道的な結末をもたらし得る課題であることを自覚していただきたい。その上で、市民社会の総意を形成するための活動を先導し、市民レベルの取組の輪を広げてほしいのです。その際に心に留めておくべきことは、自分よりも他者の立場を重視する考え方を優先することが大切であり、そうすることで人類は多くの混乱や紛争を解決し、現在に至っているということです。こうしたことを踏まえれば、国家は自国のことのみに専念して他国を無視してはならないということです。

また、市民レベルの取組の輪を広げる際には、連帯が不可欠となることから、「平和文化」の振興にもつながる文化芸術活動やスポーツを通じた交流などを活性化していくことが重要になります。とりわけ若い世代が先導する「平和文化」の振興とは、決して難しいことではなく、例えば、平和をテーマとした絵の制作や音楽活動に参加する、あるいは被爆樹木の種や二世の苗木を育てるなど、自分たちが日々の生活の中でできることを見つけ、行動することです。広島市は、皆さんが「平和文化」に触れることのできる場を提供し続けます。そして、被爆者を始め先人の助け合いの精神を基に創り上げられた「平和文化」が国境を越えて広がっていけば、必ずや核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになります。

世界中の為政者の皆さん。自国のことのみに専念する安全保障政策そのものが国と国との争いを生み出すものになってはいないでしょうか。核兵器を含む軍事力の強化を進める国こそ、核兵器に依存しないための建設的な議論をする責任があるのではないですか。世界中の為政者の皆さん。広島を訪れ、被爆の実相を自ら確かめてください。平和を願う「ヒロシマの心」を理解し、対話を通じた信頼関係に基づく安全保障体制の構築に向けた議論をすぐにでも開始すべきではないですか。

日本政府には、唯一の戦争被爆国として、また恒久平和を念願する国民の代表として、国際社会の分断解消に向け主導的な役割を果たしていただきたい。広島市は、世界最大の平和都市のネットワークへと発展し、更なる拡大を目指す平和首長会議の会長都市として、世界の 8,500 を超える加盟都市と連帯し、武力の対極にある「平和文化」を世界中に根付かせることで、為政者の政策転換を促していきます。核兵器禁止条約の締約国となることは、ノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被害者団体協議会を含む被爆者の願いに応え、「ヒロシマの心」を体現することにほかなりません。また、核兵器禁止条約は、機能不全に陥りかねない NPT (核兵器不拡散条約) が国際的な核軍縮・不拡散体制の礎石として有効に機能するための後ろ盾になるはずで、是非とも来年開催される核兵器禁止条約の第 1 回再検討会議にオブザーバー参加していただきたい。また、核実験による放射線被害への地球規模での対応が課題となっている中、平均年齢が 86 歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者の苦悩にしっかりと寄り添い、在外被爆者を含む被爆者支援策を充実することを強く求めます。

本日、被爆 80 周年の平和記念式典に当たり、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、決意を新たに、人類の悲願である核兵器廃絶とその先にある世界恒久平和の実現に向け、被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に、これからも力を尽くすことを誓います。

令和 7 年 (2025 年) 8 月 6 日

令和7年度

平和大使長崎派遣事業



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

本市は、「世界平和都市」を宣言して以来、毎年様々な平和事業を展開しており、その一つとして「平和大使長崎派遣事業」を実施しております。この事業は21世紀を担う市内中学生を原爆投下の地である長崎市に「平和大使」として派遣するもので、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを学び、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでいただくことを目的としております。平成20年度に始めた本事業は今年で第16回目を数え、延べ328名の平和大使を派遣しました。

さて、今年の8月9日、長崎市平和公園において「被爆80周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」が開催されました。

式典には94の国と地域の代表と、約2,600人の参列者が集まり、原爆犠牲者の冥福を祈り黙とうを捧げました。このことから、核兵器廃絶を求める声が世界的な流れになりつつあることが感じられます。

そして、長崎市長は式典の「長崎平和宣言」の中で、「たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。今、長崎で、世界約8,500都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。」と呼びかけました。

被爆者の平均年齢は86歳を超え、このままでは被爆体験や戦争体験の記憶は風化してしまう恐れがあります。悲惨な記憶を決して忘れないために、そして戦争や核兵器の無い平和な未来を実現していくために、私たちは、直接体験談を聞くことができる最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、若い世代に継承するということが使命であると考えております。

併せて、世界平和都市宣言における、世界の恒久平和の達成を念願するという理念から、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、様々な角度から、広い視野を持った施策を行う必要があると認識しているところです。

本事業を通して、平和大使が長崎の地で学び感じた被爆の実相や平和の尊さを周りの人に伝え、一步ずつでも平和な世界、平和な未来に近づくことを願い、今後も本事業を実施してまいりたいと考えております。

～ 平和大使の役割 ～

- 1 松戸市世界平和都市宣言を知る。
- 2 松戸市の平和スローガンである「みんなで築こう世界の平和」という心を持つ。
- 3 平和への願いを込めた千羽鶴を作製して長崎に献呈する。
- 4 長崎を訪問するにあたって「原爆とはどんな兵器なのか」「戦争がどんなに悲惨なものなのか」などを学び、平和の大切さを認識する。
- 5 長崎市では「青少年ピースフォーラム」に参加して、全国の自治体及び地元長崎の青少年たちと一緒に平和について学び、語り合う。
- 6 長崎訪問終了後、感想や記録をまとめて報告する。
- 7 長崎訪問で経験したこと、思ったことなどを家族や友達などに伝えていく。

～ 平和大使長崎派遣募集要項 ～

中学生の皆さんへ

世界平和都市宣言事業 第16回「平和大使長崎派遣」大使募集要項



(平和大使長崎派遣市ホームページ)

<https://www.city.matsudo.chiba.jp/kurashi/heiwa/heiwaishihaken.html>

松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で毎年開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生(平和大使)を募集します。

【 平和大使とは 】

- ・ 松戸市の世界平和都市宣言に基づき、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて研修や長崎派遣を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

【 申込対象者 】

- ・ 市内中学校に在学する生徒で、以下の条件すべてに当てはまる人
※過去に平和大使として長崎へ派遣されたことがある場合は対象外
(1)戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があること
(2)3泊4日の派遣期間中保護者から離れ、他校の生徒と集団生活ができること
(3)事前研修、派遣、事後研修全てに参加できること
(4)学校での発表、平和の集いでの発表、その他の平和事業に協力できること

【 定員 】

- ・ 原則各学校1名とし、全学校で22名(申込者が定員を超える場合は抽選とします。)

【 費用 】

- ・ 市の負担 松戸市から長崎市までの往復交通運賃、宿泊費、長崎市内移動バス電車運賃
8月7日(木)の夕食、8月8日(金)～9日(土)の3食、8月10日(日)の朝食・昼食
- ・ 自己負担 事前研修等にかかる会場(市内)までの交通費、8月7日(木)の昼食 など

【 申込方法 】

- ・ 令和7年5月31日(土)までに
松戸市オンライン申請システムから申込

【 研修日程 】

1 事前研修（予定）

平和についてのオリエンテーションを行います。（自主学習）

- (1) 7月6日(日) 9時30分～12時 結団式及び第1回オリエンテーション
(青少年ピースフォーラム等の内容説明)
- (2) 7月26日(土) 10時～15時 第2回オリエンテーション
(戦争、原爆、平和についての自主学習)

2 派遣研修

- (1) 場所 長崎市内
- (2) 期間 8月7日(木)～8月10日(日) 3泊4日
- (3) 内容 青少年ピースフォーラム等への参加

【 青少年ピースフォーラム 】

8月9日(土)の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

- (4) 同行者 松戸市職員4名、添乗員1名

- (5) 「平和大使長崎派遣」 行程表（予定）

8月7日(木)	松戸市役所 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル（自主学習）
8月8日(金)	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学、参加型平和学習(屋内・屋外)
8月9日(土)	平和祈念式典への参列、参加型平和学習(屋内)
8月10日(日)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 帰庁報告会 → 市役所解散

3 事後研修

- (1) 8月27日(水)締切 平和大使長崎派遣報告書（作文）の提出
派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。
- (2) 11月30日(日)「平和の集い」へ参加し、報告会を行います。

～ 平和大使名簿 ～

ねもと 根本	なつね 夏寧	(第一中学校	1 学年)
こばやし 小林	あい 愛	(第一中学校	2 学年)
まつもと 松本	みお 美桜	(第二中学校	1 学年)
かなや 金谷	ゆら	(第二中学校	2 学年)
かなおか 金岡	きお 季桜	(第三中学校	1 学年)
にしやま 西山	えいし 英志	(第四中学校	2 学年)
ますみず 舩水	さち 倅	(第五中学校	2 学年)
なかやま 中山	ほのか 穂乃香	(第六中学校	2 学年)
さくらい 櫻井	みづき 美月	(小金中学校	1 学年)
せきぐち 関口	はる 晴	(常盤平中学校	1 学年)
たちばな 橘	さう 紗良	(栗ヶ沢中学校	1 学年)
しばざき 柴崎	もね 百寧	(六実中学校	1 学年)
なかやま 中山	ゆう 優生	(小金南中学校	1 学年)
まつばら 松原	わかこ 和佳子	(古ヶ崎中学校	1 学年)
いのうら 井之浦	はるか 陽風	(牧野原中学校	2 学年)
きたの 北野	つぐみ 緒泉	(河原塚中学校	1 学年)
すずき 鈴木	たつなが 辰長	(新松戸南中学校	1 学年)
ただ 多田	にこなり 和生	(金ヶ作中学校	2 学年)
つりまき 釣巻	るあ 琉愛	(和名ヶ谷中学校	2 学年)
たけうち 竹内	なお 奈生	(小金北中学校	2 学年)
おおくぼ 大久保	あさき 明咲	(光英VERITAS中学校	2 学年)
よしの 芳野	さくら 桜	(専修大学松戸中学校	2 学年)

～ 平和大使長崎派遣結団式・オリエンテーション ～

7月6日（日）

◆結団式・第1回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

結団式では各学校から選ばれた平和大使に任命証が交付されました。

オリエンテーションでは、一人ひとり大使としての抱負を発表しました。また、事業の目的や大使の役割を確認し、青少年ピースフォーラムの説明を受け、先輩大使に貴重な体験談を話していただきました。



〈オリエンテーション〉



〈先輩大使の体験談〉

7月26日（土）

◆第2回オリエンテーション〔市役所議会棟3階特別委員会室〕

長崎派遣に向けて、リーダー・サブリーダーや派遣中のルールなどの必要事項を決め、コミュニケーションを図りました。

午後は2つのグループに分かれ、グループワークを行いました。「争いの原因」と「争いをなくすためにはどうしたらよいのか」をそれぞれに考え、意見交換をしました。そして、グループごとに意見を集約し発表をしました。

長崎派遣のスケジュールと注意事項を確認した後、原爆資料館に献呈する千羽鶴を作るため、大使たちが折った鶴と市民の方々が折ってくれた鶴を平和への願いを込めて一つひとつ糸でつないでいきました。

そして、千羽鶴に添える標語をみんなで話し合って考え、

「飛び立とう 戦争のない青空へ」
に決定しました。



〈グループワーク〉



〈グループ発表〉



〈千羽鶴の作製〉

～ 長崎市訪問 ～

8月7日（木）

◆9：40 長崎市へ出発

松戸市役所に集合し、出発式を行い、家族や関係者に見送られてバスで羽田空港に向かいました。13時35分に羽田空港を出発し、15時15分に長崎空港到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、17時頃ホテルに到着しました。



〈出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆17：10 眼鏡橋見学

17時10分にホテルを出発し、日本三名橋に数えられている眼鏡橋を見学しました。長崎市の街並みを散策し、ホテルに戻りました。



〈眼鏡橋〉

8月8日（金）

◆9：00 被爆建造物見学

朝8時30分にホテルを出発し、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれボランティアの平和案内人によるガイドのもと、原爆落下中心地、城山小学校、平和公園を約2時間かけて歩いて巡りました。平和案内人の方が、当時の悲慘な様子をわかりやすく説明してくれました。実際に被爆建造物を自分の目で見ること、被害がどれほどのものだったのか伝わってきました。



〈原爆落下中心地碑〉



〈被爆当時の地層〉



〈被爆校舎（城山小学校平和祈念館）〉



〈平和の鐘（平和公園）〉



〈平和祈念像（平和公園内）〉

◆12：30 千羽鶴献呈〔長崎原爆資料館〕

大使と松戸市民の思いをのせた3つの千羽鶴を長崎原爆資料館に献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉



〈松戸市の千羽鶴〉

◆12：40 自由学習〔長崎原爆資料館〕

千羽鶴を献呈した後、原爆資料館を見学しました。資料館には、原子爆弾の実物大模型や原爆の被害を受けた物品、被爆された方の写真など、資料がたくさん展示されており、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。



〈長崎原爆資料館〉



◆14：00 青少年ピースフォーラム(開会行事)参加〔長崎市平和会館〕

青少年ピースフォーラムには、全国から小・中・高校生等が参加しました。

開会行事では、青少年ピースボランティアによる開会宣言、主催者挨拶の後、長崎原爆の被爆者である三瀬 清一朗さんから被爆体験講話を聞きました。



〈被爆体験講話〉

◆15：25 青少年ピースフォーラム(平和学習)参加〔長崎市平和会館〕

続いて、青少年ピースボランティアの進行による平和学習に移りました。参加者全員がグループに分かれて、原爆資料館周辺を巡るフィールドワークを行った後に、スライド学習や戦争模擬体験を行い、被爆の実相を学びました。

また、令和7年9月27日(土)に長崎市で行われる『平和の^{ともしび}灯』で灯されるキャンドルに平和を願いながら絵付けを行い、1日目の青少年ピースフォーラムが終了しました。



〈フィールドワーク〉



〈戦争模擬体験〉



〈キャンドル絵付け〉

8月9日（土）

◆10：45 平和祈念式典参列〔平和公園〕

「被爆80周年 長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」参列の日を迎えました。

朝9時30分にホテルを出発し、大使たちはそれぞれ緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、原爆がさく裂した時刻の午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆80周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時40分 被爆者合唱
45分 開式
46分 原爆死没者名奉安
48分 式辞（長崎市議会議長）
52分 献水
54分 献花
11時02分 黙とう
03分 長崎平和宣言（長崎市長）
12分 平和への誓い
19分 児童合唱
24分 来賓挨拶
40分 合唱 千羽鶴
45分 閉式



〈平和公園〉



〈平和公園での黙とうの様子〉

◆14:00 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加〔出島メッセ長崎〕

午後は、前日に引き続き、青少年ピースフォーラムに参加しました。グループとなり、前日の平和学習を踏まえて「違い」について話し合いを深めました。

また、マレーシア元首相 マハティール・ビン・モハメド氏による特別講演を聴講し、これまでに起きた二度の世界大戦と植民地について学ぶことが出来ました。

2日間の青少年ピースフォーラムを通じて、全国から集まった同年代の参加者と活発な意見交換と交流ができ、大変貴重な体験となりました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈参加者集合写真〉

◆17:00 自由学習（出島見学）

青少年ピースフォーラムを終え、出島を散策しました。1636年に完成し約200年もの間、日本で唯一西欧に開かれた窓として日本の近代化に大きな役割を果たしてきた出島の歴史を学び、長崎市の文化に触れることができました。



〈出島見学〉

8月10日（日）

◆8：15 松戸市へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。

11時00分に長崎空港を出発し、長崎を後にしました。移動中、各々が帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時45分羽田空港到着。市の迎えのバスで、市役所へ向かいました。

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆15：00 松戸市役所到着

松戸市役所に到着。

◆15：15 帰庁報告会〔市役所新館7階大会議室〕

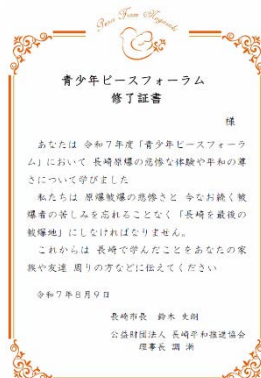
市長や議長、教育長、出迎えてくれた家族に、長崎市で見て、聞いて、体験したこと、また派遣を通して感じた平和への思いなどを一人ひとり報告し、4日間の派遣日程を終えました。



〈帰庁報告会の様子〉



〈青少年ピースフォーラム修了証書を手に集合写真〉



〈修了証書〉



〈YouTube 動画 平和大使長崎派遣 帰庁報告会〉



市ホームページ

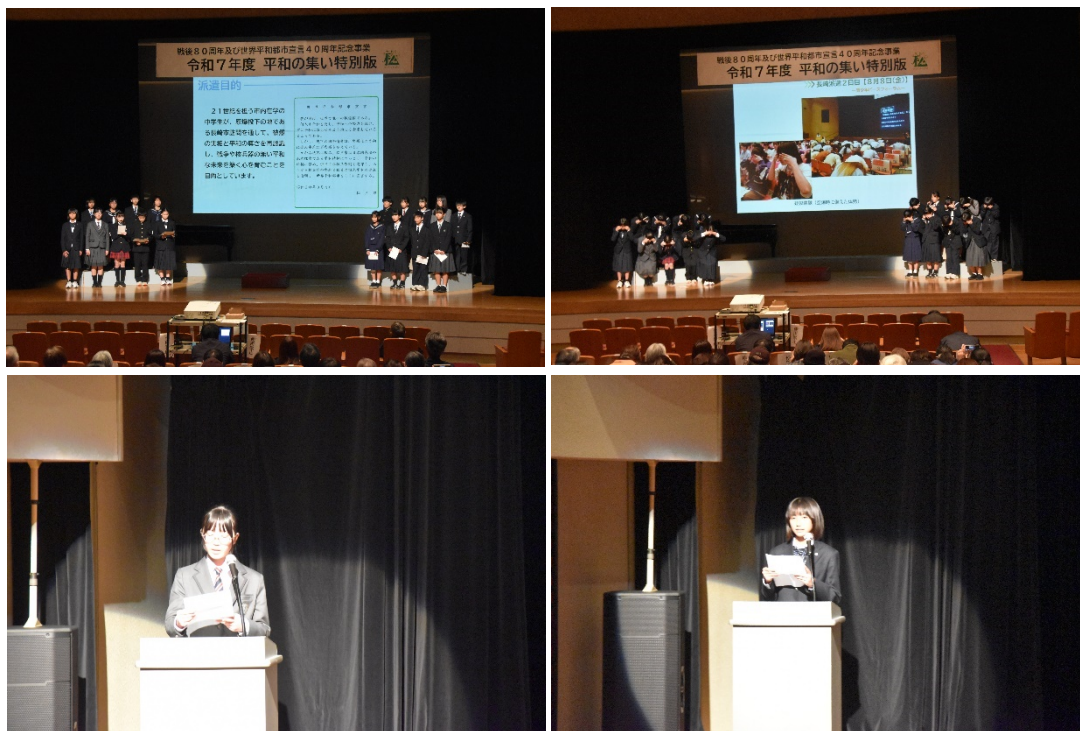
～ 平和の集い ～

11月30日(日)

◆13:10 平和大使長崎派遣報告会〔市民劇場〕

「平和の集い」の中で、大使の役割を果たすべく、長崎派遣を通して学んだことや感じたことを、市民の皆様へ報告しました。

スクリーンに映し出した写真などに合わせて、事業の目的や大使の役割、結団式から長崎派遣、そして帰庁報告会までの流れを紹介するとともに、場面ごとに学んだことや感じたこと、今後の決意を伝えました。



今年で戦後80年を迎えました。私たちの周りでは、戦争を実際に体験した方々が高齢になり、少なくなっているため、直接お話を聞くことがだんだん難しくなっています。

しかし、戦争で命を落とした犠牲者や被爆者の方々の思いを無駄にしないために、そして今後の平和を実現していくために一番重要なことは、私たち平和大使を含めた未来を担う若い世代が、平和への関心を高め、その大切さを代々受け継いで行くことだと思います。

私たちは、長崎市で見て聞いて感じた戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さをたくさんの人に伝え、次の世代に、未来の人々に伝えていく活動をしていきます。

平 和 大 使 の 報 告

戦場で核兵器を使用すること想定した核兵器
 の開発や配備が進み、核兵器使用をちらつ
 かせながら交渉しています。ロシアによるウ
 クライナ侵攻、イスラエルによるガザ地区へ
 の攻撃、いつ核兵器が使用されてもおかしく
 ない状況にあります。
 私が平和大使長崎派遣で特に印象に残った
 のは、長崎原爆資料館での被爆伝承者の三瀬
 さんのお話です。あの日、三瀬さんは三・六
 km離れた地区で被爆されました。自宅の瓦は
 飛ばされ、畳が吹き上げられ、足元はガラス
 まみれだったそうです。その後、しばらく食
 糧難となり山で野苺や雑草を採ってきて鉄板
 で焼いてももらって腹の減りをしのいでいまし
 た。中でも一番おいしかったのは、蜂の巣を
 火で炙ると出てくる蜂の卵であつたそうで、
 まるで“原始人のような生活”と表現されて
 いました。三瀬さんの通っていた学校は救護
 所となり、ひっきりなしに重体の方が運び込
 まれ、水を求めるうめき声が続いていた。

20 × 20

夏休みの終わりに、高学年を集めて校庭の清掃
 をしているのと、人の指の骨が大量に落ちてい
 ました。先生にそれを伝えようと「箱の中に入
 れて、清掃後校庭の端に埋めるよ」と言われ
 ました。当時わずか十歳の少年がその様子を
 見て、「これが戦争なのか」としか思わなか
 ったそうです。
 ところが戦争なのです。日常の生活に、死体
 や遺骨があることが考えられますか。
 ところが戦争なのです。子どもが空腹の日々
 を過ごすことが。
 原子爆弾は、強烈な熱線により爆心地で地
 表の表面温度が三千〜四千度に達し、瓦屋根
 が一瞬で沸騰したという説明を受けました。
 水を求めて亡くなった方が多かったの、水
 盤が六か所設置されていたことはとても印象
 的でした。また、亡くなった方々の名簿と写
 真がスクリーンに映し出されるというコーナ
 ーがあったのですが、自分よりも幼い子ども
 がたくさん亡くなっていたことや写真すら残

20 × 20

っていない方がいることを知りました。「私
 たちの立っている台地の下には、生きたくて
 も生きられなかった人がいるのを忘れないで
 ください」というメッセージは胸がえぐられ
 るように感じ、決して忘れることができない
 ものとなりました。一九四五年八月九日午前
 十二時二分、プルトニウム二三九を原料とし
 たより強力な原子爆弾で投下により、長崎市
 では死者七三八八四名、負傷者七四九〇九名
 の被害者が出ました。
 今回の松戸市の平和大使長崎派遣は二十二
 名でしたが、二日目の青少年ボースフォーク
 ムでは他県の大使や長崎市内の高校生らと合
 流し三〇〇名以上が参加しました。松戸市内
 の他校の中学生と「戦争」「原爆」「平和」
 について話をすることは貴重な経験でしたが、
 自分が思った以上に同世代がこのことに興味
 を持ち行動に移していることを知り嬉しく感
 じました。しかしながら、私たちだけではな
 く私たち世代ひとり一人が戦争を「自分事」

20 × 20

として捉えなくではいけないとも感じました
 戦争は、戦争の記憶が薄れたときに起きます
 今を「戦前」とすることがないよう、当時の
 記憶・記録をいかに継承していくかが社会的
 な課題です。
 太平洋戦争終結から八十年目を迎えた日本
 原爆資料館では、被爆伝承者の肉声での動画
 撮影を進めているそうです。AI技術と人の手
 によりカラー化した渡邊英徳先生と庭田杏珠
 さんによる「AIとカラー化した写真で近年、
 よみがえる戦前・戦後」という写真集が話題
 となっています。カラー写真になったことで
 現在と地続きに当時を感じられるという意見
 が多数です。原爆の写真を見て「怖い」と言
 っていた私の妹が、写真に色がついていると
 怖さが軽減すると話していました。
 記憶・記録をどのように継承するか、平和
 であり続けるために何すべきか、私一人の力
 や声は小さいですが色々な方法を考えて行動
 に移していきたいです。

20 × 20

。

”

2
平和を未来につなぐために

第一中学校 2年

小林 愛

この夏、私は平和大使として長崎を訪れました。被爆者の方の体験談を直接聞き、平和祈念式典に参列するなど、普段の生活では得られない貴重な経験を通して、平和の大切さを学びました。

これまで、教科書などで戦争のことを学んだり、親から話を聞いたりすることはありましたが、どこか現実感がありませんでした。しかし、長崎で実際に資料館の展示を目にしたことで戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさが、初めて心に迫ってきました。焼け焦げた衣服や、変形した日用品に加え、被爆直後の街の惨状を写した写真や、爆風で傷ついた人々の姿が映し出された写真も展示されていました。

あまりに生々しく、思わず目をそらしたくなるようなものもありました。これら一つひとつが当時の人々の日常であったことと知り、

20 × 20

自分の日常を振り返ると、毎日、家族とご飯を食べ、安心して生活できることがどれほど幸せで恵まれているかを改めて実感しました。一瞬にして普通の生活を失った人たちのことを思うと、平和の大切さが胸に深く刻まれました。

さらに原爆の疑似体験では、空襲警報のサイレンや大きな爆発音に触れました。心の準備はしていたものの、その瞬間は全身がすくむほどの恐怖でした。これが実際に日常生活の中で突然起こったのだと考えると、当時の人たちが抱いた恐怖心や不安、そして絶望感には計り知れないものだったと強く感じました。

被爆体験講話では、戦争や原爆の恐ろしさを後世に伝えようとする思いを聞き、本来であれば忘れてしまいたいくらい辛く苦しい出来事であるはずなのに、一生懸命伝え続けるその強さに心を打たれました。

長崎派遣を通して学んだのは、平和は当然ではなく、日々の小さな選択や行動で支えら

れているということです。戦争は、互いの考えや立場を尊重せず、自分の価値観だけを優先する心から生まれるのだと思います。日常の中で、たとえば、他の人の意見に耳を傾け、違いを認め合うことも、争いを避けるための一歩になります。私は、今回の長崎派遣で、感じたこと、学んだことを忘れず、次の世代につなぐ責任を果たしていきたいです。

3
『感じた思いと込められた願い』

第二中学校 1年 松本 美桜

私はこの夏、長崎平和大使として長崎を訪れ、戦争や原爆の悲惨さ、そして平和の大切さについて学ぶことができました。現地で実際に見聞をしたことは、平和の尊さを改めて考える大きな機会となりました。

訪問中には、平和公園や原爆資料館などを見学しました。当時の出来事や人々の記録に触れることで戦争の被害の大きさを理解することができました。その中でも特に印象に残ったのは、城山小学校と千羽鶴です。

城山小学校は爆心地に最も近い学校で、多くの子どもや先生が犠牲になりました。現在も校舎の一部が残されており、当時の爆風のあさましさを伝えています。壁に残った傷跡を目の前で見たとき、教科書や写真で学ぶだけでは分かっていなかった現実を肌で感じることができました。私は普段、毎日当たり前のように学校に通っています。しかし、もし自分の

20 × 20

学校が一瞬で壊れ、友達や先生が突然いなくなってしまうたうどうなるのかと考えると、恐ろしさを実感しました。この体験を通して、平和な日常は決して当たり前ではなく、多くの人の努力によ、て守られているものだとして理解しました。また、平和公園や城山小学校には、多くの千羽鶴が捧げられていました。赤や青、黄色など色とりどりの鶴が連なり、風に揺れている姿はとても印象的でした。その数に圧倒されると同時に、国内外を問わず多くの人が平和を願っていることを強く実感しました。一羽の鶴を折ることは小さな行動にすぎません。しかし、それが何千羽、何万羽と集まることで大きな祈りや希望になるのだと思いました。さらに、海外から送られた千羽鶴もあると聞き、国や言葉が違っても平和を願う気持ちは同じなのだと感じました。千羽鶴は、平和を願う人々の思を形にしたものであり、それを実祭に目にしたことで自分も小さなことから平和に貢献できると考える

20 × 20

ようになりました。

今回の訪問を通して、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて学びました。城山小学校からは原爆の被害の現実を、千羽鶴からは人々の平和への願いを知ることができました。これからの学びを忘れず、今後は自分の周りに伝えることで平和を守る力の一部になりたいと思います。まあ、これまでには「戦争は恐ろしいもの」という漠然とした理解しかありませんでしたが、今回の訪問を通じて、自分の生活と結びつけて考えられるようになりました。平和は一人ひとりの小さな行動の積み重ねによって守られるのだと学びました。さらに、一緒に派遣に参加した仲間と意見を交換したことで、新しい気づきや考え方を知ることができました。この経験を共有できた仲間の存在も、私にとって大きな学びとなりました。

平和の尊さと未来に伝えていくには

松戸市立第二中学校 2年

金谷 ゆら

1945年8月6日午前8時15分、8月9日午前11時2分。広島、長崎に原子爆弾が投下されました。原子爆弾の恐ろしさや平和の尊さについて理解を深めるため、私は平和大使を務めました。長崎へと派遣された4日間では、原子爆弾の被害について学びましたが、特に印象に残った事が2つあります。

1つ目は、原爆資料館へ行った事です。資料館には、想像を絶する写真や物が沢山展示されていました。皮膚が焼け爛れて真赤になってしまった方や、黒焦げで身元の判別もできない焼死体の写真を見ると、思わず目と背けたくなりました。どれだけ痛かったんだろうか。苦しかったんだろうか。怖かったんだろうか。私には想像でさえませんでした。また、4000度にも達した熱線によって、こけこけといった瓶や硬貨、爆風により飛び散ったが

20 × 20

ラスの破片が突き刺さり、背中部分が破れている服などが至る所に展示してありました。丈夫な物でさえボロボロにしてしまう原子爆弾。今では、長崎に投下された原子爆弾の比にならない程の威力を持つ核兵器が世界に12000発以上存在していると思うと、恐怖と不安でしかありません。私は、原爆資料館を見学して、初めて自分の目で原子爆弾の被害について学びました。たった一発で多くの人々の命、当たり前前の日常を奪ってしまう核兵器が、世界に存在しているという事実を決して許してはいけなさと、改めて感じました。

2つ目は、青少年ピースフォーラムでの被爆者体験講和です。被爆当時は10歳で、爆心地から3.6km離れた家で被爆された三瀬清一郎さんに話を聞きました。爆風の影響で、畳は吹き飛ばされてひっくり返り、壁や柱には窓ガラスの破片が突き刺さっていたそうです。また、小学校の様子を見に行くと、体育館は血だらけの負傷者でいっぱいでしたが、

感覚が麻痺しており、何も感じなかつたと語っていました。戦争や原子爆弾は、命や日常だけでなく、感情さえも奪ってしまうのです。まだ幼い10歳の子供が経験したとは思えない内容の話に、胸がきつく締めつけられました。当時の三瀬さんは、明日自分が生きていくのかも分からず、安心して眠れなかつたそうです。日本の敗戦を知った時には、もう命の心配をする必要がない、安心して生活できると戦争が終わって喜びを感じたとおっしゃっていました。戦争は、人々から全てを奪い、最後に悲しみだけを残します。二度とこのような意味のない争いを繰り返してはいけません。80年前の戦争となかつた事にしてはいけません。そう心に誓いました。

私は、長崎での4日間を通して、戦争や核兵器について、目で見て、耳で聞いて、自分自身の5感を通して学びました。戦争を二度と起こさない、起こさせないためには、人々が戦争の悲惨さについて知る事が必要だと考

20 × 20

えます。しかし、実際に戦争を経験された方が減っており、後世へと平和の尊ことを伝えていく人が少なくなっています。そこで、私達平和大使が長崎での経験を家族や友達に話していきます。そして、平和の小さな輪を、少しずつ大きくしていきます。

5
～平和大使長崎派遣報告書～

松戸市立第三 中学校

1年 金岡 季桜

長崎ではよりいっそう原爆、戦争の悲惨さを知る事ができました。四日間、原爆落下中心地平和公園、原爆資料館と観て来ましたが千九百四十五年八月九日午前十一時二分原爆が落ちたあの日から八十年経った今でも消えない消してはいけない傷として残っていました。忘れてはならないこの戦争、原爆私たちが伝えたいと思います。

原爆落下中心地には原爆落下中心地標柱として原爆が落下した日付けと名称が書いていて周りには被爆当時の地層断面が見られる所もありました。そこには溶けたビンやペンなど原爆が落ちたその時も生活していた事が、分かりました。長崎原爆はファットマンという原子爆弾が落ちてきたのですがファットマンの落下所要時間は約四十三秒と言われていて秒速百四十～百七十メートルだったため、逃げる時間なんて本当になかったのだと思います。落下中心地から二千メートルは全壊

20 × 20

全焼していて爆心地から半径約五百メートル以内の範囲は、ほぼ全て跡形も残らなかったらしいです。放射能によって無傷だった人も数日や数時間後に吐き気や嘔吐、下痢、頭痛、脱毛などの症状の後に死んでしまうとこの事もありました。大切な人が跡形もなく体の一部が無くなったり、無事だと思っていたのに死んでしまったら。この戦争では本当にあったのでした。それを私が知ったのは原爆資料館でした。原爆資料館では当時使っていた小銭や鍋、衣服が展示していてところどころに血が付いていたり穴が開いていたり原爆の強さが放送や写真でとても分かりやすく説明していました。外国の方も沢山来ていて小さな子供も居ました。なぜこれほどまで沢山の人がここへ来るのかやはり日本、世界で原子爆弾が使われた跡が残っているのがめずらしく、学ばなければならぬと思っているのだと思いました。私たちもその中の一人です。青少年ピースフォーラムでは同じ想いを持。

20 × 20

ている小中高生がいっほいい居て意見交換をし
てみると大切な物、考え方、おもいつく物が
違って少しおもしろかったです。この経験をし
て少しでも戦争の事について知る機会を
作って行く事です。

20 × 20

平和大使に行き、感じたこと

第四中学校 二年

西山 英志

ぼくは、今回の長崎派遣において、原爆の
悲慘さや、命の尊さも学びました。

二日目に行き、た長崎原爆資料館では、爆発
の時刻11時2分を指して止まった柱時計や、
原爆の実物大模型（ファットマン）や、高熱
のため、上部が溶けて、1、2メートルに縮んだ
瓶などの原爆による被害の実相も学ぶことが
できました。

青少年ピースフォーラムでは、被爆者の三
瀬さんから、被爆体験講話を聞きました。
三瀬さんは、爆心地から3、6km離れた所に
住んでいて、原爆の瞬間一瞬にして11つのもの
光景が無くなり、そこをぐらぐらに死体が転が
っていて、血だらけの人が、赤ちゃんを深し
く抱いて、泣いてた人がたくさんいたそうです。ほか
にも火傷を負った人々が近くの川に集まり、
水をとって、こいさこいさで水を飲んだ人もた

20 × 20

さん11人と言っていました。当時農巴地の近
くにあった城山小学校に大勢のけが人や火傷
を負った人達が来て、人数が多すぎて、治療
が間に合わず、水を求めて、亡くなった人が
ほとんどだったらしいです。なのでその死体
を学校の校庭で焼いていて、その光景は、ま
さに地獄だ、と言っていました。僕は、こ
の話を聞いて、この悲惨な出来事を二度と繰
り返さないように、原爆の被害を長崎で最後
に出来るようにこの事を色々な人に語り続け
てあるようにします。

2回目のピースフォーラムでは、他の県や
地方から来た高校生や中学生が集まり、みん
なでガール-パワーのを行い、原爆の悲惨さな
どを話し合いこの世からどうしたら、核兵器
が無くなるのか、どうしたら戦争の無い平和
な世の中になるのかを一緒に話し合い意見を
まとめることが出来ました。この月にはもっ
し自分が戦争の被害に合った人などの実際に
映像や音を聞いて、体験をすることができ、

20×20

7
長崎派遣を通して学んだこと

松戸市立第五中学校 2年 井水 倅

1945年8月9日午前11時2分。皆さんは、この時間に何が起きたのか分かりますか。これは、長崎に、何万人もの命を一瞬にして奪った原爆が投下された時間です。

今回、3泊4日の旅で主に学んだことは、毎日当たり前の生活が出来ていることの重要性です。被爆体験講話でお話をしてくださった三瀬清一郎さん。当時三瀬さんは、まだ十歳で国民学校の5年生でした。原爆投下日、学校は夏休みだった為、家で母と祖母、兄弟と一緒に過ごしていました。すると突然、ピカッと光ったのです。数秒後に、ドーンと鈍い音がしてものすごい爆風が一気に家を吹き抜けました。ご本人は、もうだめなんだと思っていたそうですが、家族全員無事だったそうです。しかし、家の中は無茶苦茶になってしまい、片付け作業に追われる日々でした。数日後、友達と一緒に学校の様子を見に行くと、

20 × 20

なんと救護室に様変わり。沢山の怪我人が運ばれて来ていました。「水を、水を」と叫び、苦しみのあまり「殺してくれ、殺してくれ」との声が、四方八方から聞こえてきたそうです。又、亡くなった人達は、グラウンドに運び込まれて、木材なども含んで埋められてしまいました。その後、玉音放送で終戦を知らされました。終戦後の生活は、食料難に苦しみながらの生活でした。友達と山に行って、どんぐりの実を採り、お母さんに焼いてもらったりするなど様々な工夫をして、空腹にたえていました。しかし、クラスメイトと交わす言葉は、「よう、生きとったね。助かって良かったね。」という言葉でした。三瀬さんは、とても悲しい二学期だったと話しています。終戦から約20年後に結婚し、2年後には元気な赤ちゃんが生まれたそうです。私は、この被爆体験講話を聞いて、当たり前の生活が出来るということは、どれだけ幸せなのかということを感じさせられました。何気ない日

20 × 20

常を送れていること、自分の好きなものがす
ぐに手に入ることなどがどれだけ素晴らしい
のかということも考えられました。平和な日
々を送れることに感謝を忘れずに、一日一日
を大切にしながら生活していきたいです。又、
松戸市代表の平和大使として、長崎派遣で学
んだことを家族や友達などの周りの人々に伝
えられるように、日々日々精進していきたい
です。

平和大使長崎派遣を終えて

松戸市立第六中学校二年 中山 穂乃香

私が平和大使長崎派遣に行って感じたことが二つあります。

一つ目は、命と平和の尊さです。

一九四五年八月九日午前十一時二分長崎市の上空五百メートルで一発の原子爆弾が炸裂し一時にして大勢の命が奪われました。

二日目のピースフォーラムでは、当時十歳で被爆した三瀬清一朗さんの話を聞きました。

三瀬さんの家は爆心地から三、六キロメートル離れたところにあり、その日は警報も解除されて、お昼にごちそうであるさつまいもを食べる予定でした。

午前十一時二分突然ピカッと光り、数分後に目を開くと爆風で家の中はちがっていたが三瀬さんはタンスの陰にかくれて無傷だったそうです。さつまいもが入っていた壺の中はガラス片が入っていて食べられず、その晩は水だけでしのいだそうです。

学校が再開しても仲の良かった友人が亡くなっていて学校へこなかった時は悲しかったそうです。

また戦時中は外に出て友達と遊びたくても遊べず、作物をつくりたくても爆弾が降ってくる恐れがあるためにつくれず、食料難に陥っていたそうです。

そのためか時々白米をおなかいっぱい食べる夢を見たそうです。そのお話を聞いてこれからは、食べ物があり、毎日おなかいっぱい食べられていることに感謝して食べていきたいと思いました。

二つ目は平和への取り組みについてです。日本に落された二つの原子爆弾、あの日起きた出来事をくり返さないために、また忘れられないために貸料館、平和式典、ピースフォーラムなどの平和事業があり、もう二度と被爆者を出させないという強い思いを感じました。

三日目のピースフォーラムでは「ちがひ」

について全国の大使たちと意見交換をしました。好み、性別、宗教、方言、言語などのちがいがあっても互いを認め合っていくことが大切だと共有しました。

特別講話ではマレーシア元首相が通訳を通して、これまで起きた二度の世界大戦、そして植民地のことについて語っており、最後には「核兵器をつかわず、平和的な解決をするべきだ」と強く話していました。

ただ現状は、今すぐ止められないのも事実で、最近でもインドとパキスタンといった核保有国同士の対立がありました。

しかし、我々のような若い世代が被爆した方々の話を聞き、広めていくことで次の世代にしっかり伝えていかなければならないと感じました。

今後は疑問に思ったことなどをたくさん調べて視野を広げ、平和的思考を持ち続けたりして物事を考えていきたいです。

最後に、今回このような体験や経験をさせ

てください。た市の職員の方々や添乗員さんと一緒に長崎へ行った大使たちに感謝いたします。

平和への思い

松戸市立小金中学校 1年 櫻井 美月

私は平和大使として4日間、長崎へ行ってきました。

1日目は眼鏡橋へ行きました。眼鏡橋はアーチ型の石橋で水面に映る影が眼鏡のように見えることから名付けられた橋です。日本最古のアーチ式の石橋の1つで国の重要文化財に指定されています。石垣の中にいくつか隠れているハートストーンというハート型の石を見学した後、路面電車に乗ることもでき長崎の歴史を感じられた1日目となりました。

2日目は原爆落下中心地へ行き、平和案内人の方に被爆建造物ガイドをしていただき、城山小学校、平和公園、原爆資料館を見学しました。その後青少年ピースフォーラムに出席させて頂きました。原爆落下中心地には黒御影石の碑が立てられていました。この上空500m地点で原子爆弾が爆発し、一瞬で何万人もの命を奪った事を考えるととても胸が

苦しくなりました。近くには被爆当時の地層が残されており、原爆によって壊された建物の互やレンガ、焼け焦げたガラスなどが埋没していて、爆風の恐ろしさが伝わってきました。そして、公園と原爆落下中心地の横を流れる下の川がありました。原爆が投下された時、人々が熱傷によるのどのかゆきや、熱さから水を求めて集まったそうですが、川の水を飲むと炎症を起こして息絶えてしまい、川にはたくさんの遺体が折り重なっていたそう。その光景を想像するだけで、とても恐ろしい気持ちになりました。城山小学校は原爆落下中心地から500mの地点に位置し、最も爆心地に近い小学校で、1500人の児童のうち約1400人が亡くなってしまったそうです。城山小学校は元々真白でとてもきれいな小学校だ。たそうですが、上空から見ると目立ってしまうため黒く汚して、円形の窓も半円にして敵に見つかりにくくしたそうです。その城山小学校は児童たちの意見に

よって残され現在は平和学習の場として、そして原爆の悲惨さを伝える重要な場所となっています。

原爆資料館では、11時2分に原爆の衝撃で止まった時計や溶けてくっついた瓶、ガラスが刺さった衣類、原爆の模型などが展示されていて、原爆の威力の大きさに改めて驚きました。

青少年ピースフォーラムでは被爆者の三瀬さんにお話を聞きました。三瀬さんはおばあさんとお母さん、6人の兄弟と暮らしており原爆が投下された時はオルガンで遊んでいたそうですが、オルガンが壁側に寄せられていたため、壁に助けられ奇跡的に助かったそうです。ご家族は居間におりダンスに助けられ無傷だったと聞き、三瀬さん一家の無事に胸をなでおろしました。しかしその後、三瀬さんは放射線物質を含む黒い雨を浴びてしまったそうで、後に黒い雨の正体を知り、結婚して産まれた子供の健康に被害がないか...と不

家で「指は両手両足5本ずつありますか？」
と看護師さんに聞いたそうです。戦争の痕跡
を目で見て耳で聞き、そして想像し、戦争を
してはいけない、長崎を最後の被爆地にと、
あらためて強く思いました。

3日目は平和祈念式典に参列させて頂きま
した。また、2度目の青少年ピースフォー
ムに出席させて頂きました。

平和祈念式典では、平和への思いを巡らせ
もう2度と人々に悲慘な思いをさせてはいけ
ないということをご皆で誓いました。

2度目のピースフォーラムでは中学生同士
で「違い」について意見交換をしました。違
いから生まれる差別やいじめがやがて大きな
争い、戦争につながっていくというようなお
話を通して、お互いの違いを受け入れ、相手
にしかないものと、自分にしかないものをゆ
うごうさせ平和を作っていったら良いのでは
ないかと感じました。

4日目、長崎からの帰り道、見たもの、聞

いたこと、感じた事を思い返しながら、この
4日間で学んだ事を多くの人に伝えていくこ
とが私たち平和大使の使命だと感じました。

今回戦争について知らなかった事を知り、
平和への気持が強まりました。

私たち平和大使が「伝える」事で一人でも
多くの人が戦争を知り平和への関心が強くな
り、皆で平和な世界を作り上げていけたら良
いなと思います。

10
長崎での貴重な体験

常盤平子学校 一年 関口 晴

僕が、4日間長崎に滞在し、学んだ事を報告します。今後の人生でも残り続ける貴重な体験でした。

まず一日目、この日はほぼ移動でしたが、最後にとっても素敵な体験をしました。それは、目鏡橋での散策でした。目鏡橋は日がうまく重なると、反射し目鏡のようにつつるというものでした。さらに、周りの石垣には人工のハートの石が20個がくまれているという事で探し、とても緑起が良いなと感じました。散策が終わり、ホテルに帰る時には、路面電車に乗る事が出来、特別な感じがしました。ホテルもきれいでいて、他の部屋の友達と遊び、非常に楽しい時間を過ごした一日目だと思いました。

次に、二日目、この日は勉強づくしの日だと思っていたのですがとても貴重な体験をする日でした。初めての長崎での夜を過ごし、

次の日は、まず最初に原爆落下中心地公園に向かい、戦争の実態を直視して感心しました。熱線で溶けたビルや戦時中の防空壕などを見学し、戦争の恐ろしさを表わして感心しました。その後、城山小学校へ行き、当時の戦いを想像し言葉が出ない思いをした。昼食の後、青少年ピースフォーラムというものに参加し、被害者の二瀬さんのお話を聞きました。どんなものよりも説得力があり、少し鼻がたちました。人生でまだとない貴重な体験でした。この貴重な体験を無駄にしないためにも、周りの人や友達に伝えるべきだと感じます。その後、ホテルに戻り、明日の準備をしました。この日は自分にとって大切な日だと深く感じました。

ついに3日目も向かい、この日は朝からすごく激しい雨でした。平和祈念式典もあり、とても楽しみになっていたのが少し残念だった。でも、まだまだ楽しみでした。会場は非常に人がいっぱいいてすごいなと思いました。内閣

長崎平和大使の役目

栗ヶ沢中学校一年 橋 紗良

私は、長崎に行つて4日間、原爆資料館や被爆地の見学、青少年ピースフォーラムと平和祈念式典への参加、被爆体験講話の話を聞くなどの貴重な体験を通して、平和の尊さ、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さについて学びました。この二つの事柄によつて命の大切さをあらためて感じることができました。

原爆資料館には、原爆の影響で、ほろほろになった服や物、とけてくっついたガラス瓶、折れた木々に焼け野原、真っ黒になった死体、大ケがをした人達などの様々な写真や実物が展示されていました。また、被爆者が原爆投下後に経験したことが書いてある作文と絵、放射線による影響についての展示物もありました。これらの展示物を見て、私は悲しく思いながら核兵器の恐ろしさと、戦争の悲惨さについて知ることができました。そしてもう一つ印象に残った被爆体験講話では、平和の

尊さとし、資料館では知ることはできなかつた。被爆後の状況についてくわしく知ることができませんでした。当時10歳だった三瀬さんは、爆心地から3.6km離れた屋内で被爆し、無事だったのですが、家の中は惨憺たる有様で、柱、ふすまにはガラスの破片がつきささっていたり、とめちやくちやくだったそうです。数日後、学校に行くと、想像を絶する場で、瀕死の人や大火傷でリヤカーで運ばれてくる人、水を、水を、と叫ぶ人、血だらけの人など、様々な人が学校に運ばれ、救護が間に合わず亡くなつた人は校庭で焼かれていたそうです。そして当時、食料がなく、いつもおなかをすいていたそうで、母親からは「動かないで寝ときなさい」と言われていたと三瀬さんは言っていました。原爆が長崎に落とされて7日後の1945年8月15日、日本は負け、戦争は終わりました。ですが、被爆者は結婚のため、仕事のためと差別をされていました。今は差別もなくなり平和ですが、80年たった今でも被

爆者達は、原爆で負^お、た体の傷、心の傷は残、
たままです。苦しんでいます。そんな体験をした
人達の生の声を聞いてほしいと三瀬さんは話
していました。そして最後に、

「平和は人類共通の世界遺産」
という素敵^{すてき}な言葉を残しました。私は、三瀬
さんの貴重な話を聞いて、これからもずと
続くはずだ、た人生を、た、た一発の原子爆
弾によ、て一瞬にうばわれ、生き残、た人達
にも苦しみを残して、なんて残酷なんだろう
と思いました。ですが、こんな残酷なことが
世界では起こ、ています。また、今の核兵器
は原子爆弾の数百倍あり、核兵器として使用
できる核弾頭^{かくだんとう}は1万発をはるかにこえていま
す。核兵器は使用することに限らず、所有す
ることそのものが許されるものではないと思
います。最近ニュースなどで、よく戦争につ
いての記事がでています。あるニュース番組
の人が、今起きている戦争に被害を受けてい
る男性に取材をしていました。そのとき男性

は、¹「平和はもらいものです」と話してしま
した。たしかに平和は、はかないものだと思
いました。ですが、皆が平和人の願い、思い
が強ければ強いほど平和はずっと続くと私は
思います。

戦争も核兵器もない平和な世界にするため
に、美しい地球を守るために、地球市民であ
る私達が平和を築いていくことと、身近なこ
とからできる事をするのが大切だと思います。
私はこの4日間で知ったこと、聞いたことを
まわりの人に伝えていき、被爆者の思いを次
世代につなげていこうと思います。もう二度
と悲惨なことをくり返さないように、平和が
続くように。

私は永遠の平和を願います。

長崎を最後の被爆地へ

六実中学校

1年 柴崎 百寧

1945年8月9日11時2分、長崎に原爆が投下され、その日のうちに7544人が亡くなられ、たとえ生きぬいたとしても、肉体的、精神的に地獄のような生活が待っていたそうです。そして80年経った今、どうなったのかというと長崎原爆の2千倍ともいわれる核兵器が世界に12340発あると知りました。

広島長崎以降、核による攻撃は一度も行われてなく、核による抑止力、つまり核でにらみをきかせておけば人類は平和を保てるという考えに、誰もが疑問を持ち始めているのに、も関わらず、世界には12340発存在しています。こんな世の中は果たして本当に平和といえるのだろうか、長崎平和大使として現地に行ってみて疑問に思うようになりました。

3泊4日の長崎では、平和案内人による被

20 × 20

爆建造物ガイドを受け、フィールドワークに出かけ、青少年ピースフォーラムに2回参加し、平和祈念式典に参列しました。どの場面も、優しい時間でした。耳をふさぎたくなるような、目を覆いたくなるような、心が引き裂かれるような話もたくさんありましたが、優しい空気でした。

それはなぜだろうと考えてみました。おそらく、真剣に伝えている人がいて、それを真剣に聞こうとする人が全国から、世界から集まり、認め合おうという空気が優しかったのだと思います。本当の平和とは核でとなりの人を威嚇しながら保つものではなく、となりの人を理解しようとする優しさから生まれるのだと気付きました。

原爆から80年が経ち、被爆者の平均年齢は86才を越えています。被爆当事者の生の声を聞けるのは、私たちが最後の世代です。原爆の記録は今の技術なら比較的簡単に未来に残せても、被爆当事者の方々の大切な記憶は語

り継がなく ては未来 に残せません。記憶を残すために私達の世代は自分で意識して見る、聞く、伝えるということをしていかなければならないと強く思いました。長崎を最後の被爆地にするために平和大使の輪がみんなに伝わればいいなと思います。

報告書

小金南中学校
1年 中山 優生

まず始めに、この平和大使の派遣を企画・運営していただいた方々、そして松戸市・長崎市に感謝致します。

戦後80年という節目の年に、長崎へ勉強に行けたことは、一生忘れられない経験となりました。

松戸市長から直接任命状をいただいた時点で、「学校そして松戸市代表の平和大使として長崎に派遣されるなんて責任重大だなあ」と緊張したのを今でも覚えています。

3泊4日のこの長崎平和大使派遣で原爆と戦争について、色々な事を見て聴いて、そして同じく派遣された方々と意見交換をしてきました。

皆口々に言っていたのは、平和はあたり前ではないということ、戦争はひさんで残酷で誰も幸せにならないということ、もう二度と戦争をしてはならないと後世まで語り継ぐ必要があるということでした。

長崎派遣で一番印象に残ったのは、三瀬青

一朗さん90才のお話です。原爆を体験された方に直接話を聞けるチャンスは年々減っている中、この機会は本当に貴重でした。お話を聴いて、今までには死者何万人という言葉は—まつまりとしてしか頭に入、てきませんでした。たが、その一人ひとりに生活があ、た、物語があ、たということを改めて考えさせられました。

三瀬さんのお話は、今まで目にしてきた資料や本よりも、すーと心の中に入、ていき、まるで自分もタイムスリップしたかのように、当時の長崎のひさんな光景が頭に浮かびました。長崎から帰、てしはくは、空に飛行機が見えるとB-29かと思うくらいでした。

1945年8月9日午前11時2分、長崎の街に原爆が投下され、一瞬にして目の前のあたり前だ、た光景、生活が消えました。爆風に吹き飛ばされたり、黒こげにな、て亡くな、た、り、ガラスが体に刺さり「痛い!! 痛い!!」と言いなが、て亡くな、た方々の死体で埋め尽く

20 × 20

され、「水を、水を」と叫び、苦しきのあまり「殺してくれ、殺してくれ」という声があちこちから聞こえ、人が焼けるにおいやその光景は、本当に地獄のようだったと思います。そのような中で、三瀬さんのように残された被爆者が、一番ご苦勞をされたのではないかと思います。家族や知人との突然の別れに泣き、原爆後遺症による身体の不調や不安、原爆病はうつるのではないかというひぼう中傷や偏見、それらをのりこえて、長崎を始めとする日本の復興に全力を尽くして人生を歩んでこられた方々には、どれだけのご苦勞があり、どれだけの努力をされてきたのか、計り知れません。その並々なぬ努力の上に、僕たちの住む今の日本があるのです。

さらには、原爆を投下されたむごい経験を、後世に語り継いで、長崎を最後の被爆地にしよう、原爆をなくそう、戦争をなくそうという活動をしている被爆者は、自分の辛かった経験を思い起こして話をするのでから、

20 × 20

とても勇気のいることだと思います。その勇気ある経験談を無駄にはせず、平和大使として今後も活動していきたいと思っています。

今でも戦争が起こっている国があります。毎日たくさんの方が戦争の犠牲になっています。世界中の皆が幸せだと思う、そんな世界を築いていけるよう、長崎で勉強したことを後世に語り継いでいこうと思います。そして、平和のバトンを世界中に伝えていこうと思います。

最後になりますが、戦争で亡くなった方々の御冥福をお祈り致します。

私達にできること

松戸市立古ヶ崎中学校 1年

松原 和佳子

1945年8月9日11時2分長崎に原子爆弾が落とされました。私は、今回の派遣で原子爆弾の恐ろしさや戦争の悲惨さを学びました。

長崎派遣2日目原爆資料館に行きました。そこには原爆の爆風で飛び散ったガラスの破片が刺さった跡のある洋服。熱風の熱さで溶けてくっついている瓶。熱を受けて泡を生じ火ぶくれを起こした建物の瓦礫。粉れもなく、「原爆が長崎に落ちた」という悲惨な事実を物語っているようでした。そして、この日に投下された原爆は、約15万人もの人に被害を与え、そのうちの約半数はもう二度と帰らぬ人になってしまいました。ですが、原爆の恐ろしさは、これだけでは収まりません。目に見えない放射線、という狂気で命を落とされた方。「被爆しているから」というだけで

20 × 20

結婚するな。子供が不健康に産まれたらどうするんだ。と根拠のない差別を受けた方。放射線の影響で今もなお、苦しみながら生きている方。多くの命を、幸せを奪い取るのです。

被爆体験者の三瀬清一郎さんのお話を聞きました。三瀬さんは、毎日のように空襲警報を聞き、訓練をし、毎日のように怯える日々を送っていたそうです。8月9日11時2分。忘れもしない、この日が訪れました。「ピカーッ、ドォッーン!!」爆音と閃光と同時にものすごい爆風が三瀬さんを襲いました。その時のことを三瀬さんは、「もう一つの太陽が落ちてきたのだと思っ た」と、おっしゃっていました。爆発が起き目を開けると、家は滅茶苦茶に壊れていて、震えが止まらなかったそうです。後日、学校が気になり様子を見に行くと、性別がわからないほど黒焦げの人。

「水を、水を」と叫ぶ人。苦しみのあまり「殺してくれ、殺してくれ、」という声。

そこは、まさに地獄の救護所だ、たと語って

くださいました。ですが、薬も水もない現状が続き救護が間に合わず、命を落とした人が次々と現れてきてしまったそうです。戦後も食料不足が生じ、山へ木の実をとりに行ったり、魚をとって食べていたそうです。そして、三瀬さんは、「戦争には、勝ち負けもない。待っているのは悲しみだけ」と言いました。私は、確かにそうだなと深く共感しました。

皆さんの「当たり前」とは、どのようなものでしょうか。毎日、お腹一杯にご飯を食べられることですか？学校に通えることですか？最愛の人がそばにいることですか？そう、現代では、こんなこと当たり前です。ですが、当時は、どうなんでしょうか。食料は、戦場に行っている兵隊さんに配布したため、ありません。お腹一杯食べるなんて、ものすごい贅沢です。学校に行っても訓練ばかりで、サイレンがなった時には家に帰されてしまいます。こう考えた時、私は改めて、日々の生活がどれだけ恵まれていたものなのかを実感

しました。「戦争」それは、生き地獄です。人の不幸を呼び起こすだけです。そんなものは、ある価値なんてないと思います。しかし、いまだにロシアとウクライナの戦争は止みません。イスラエルとハマスの紛争も止まりません。核兵器はこの世界にいくつも存在します。それも広島、長崎に投下されたものよりも威力があるものです。核実験も2000回以上行われています。戦争をなくすことはできないのでしょうか。けれど「なくならない可能性」があるなら、なくなる可能性だ、である」と、信じていたのです。戦争の悲惨さを知った私達が、原爆の恐ろしさを知った私達が、「長崎を最後の被爆地にする」という想いを受け継ぎ、後世に平和のバトンを繋いでいくこと。それが私達、一人ひとりができることだと思います。そして、この学びをより多くの人に伝えていきたいです。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さったことに感謝します。ありがとうございました。

ました。

昔と今、これからの使命

松戸市立牧野原中学校 2年

井之浦 陽風

今から80年前の1945年、8月9日午前11時2分、原子爆弾は人々の命と生活を奪いました。原爆によってこの年の12月までに亡くな。た方、怪我をしたり病気になった人は、当時の長崎の人口の半分以上になります。

私は、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さ、被害を受けた人の想いをより深く学びたいと考え、今回の長崎平和大使に参加させていただきました。

私は、長崎へ派遣されていた四日間で心に深く残ったことがいくつもありました。

最初は当時原爆が落ちたとされる場所や、爆心地に一番近か。た城山小学校を平和案内人の方に説明してもらいながら見に行きました。原爆が落ちた時、熱をどうにかしたくて川に飛び込んだ人で川が埋まっていたそうで

す。城山小学校へ行くと当時の物とされる衣服が展示されていたのですが、ガラス片が刺さり穴だらけになっていて、どれほどの勢いの爆風が吹いたのか想像するだけで胸が苦しくなりました。これは後に知ったことなのですが、爆風の速度は秒速440mという、陸上のトラック1周以上の速さで、落ちてきたら逃げることはできないそうです。

その後の青少年ピースフォーラムでは当時10歳で実際に被爆を経験している三瀬さんという方に、被爆した時に思ったことや二期になって学校へ行くと大切な友人がいなくなっていた時の悲しみ、これから先も伝えていきたいことについてなど、思い出すのも辛いであろう原爆についての記憶を沢山教えていただきました。原爆が落ちたとき、三瀬さんは「太陽が落ちてきたと思うほどの光に包まれた。」「その後も食料難や、亡くなってしまう人が自分の通う学校で焼かれるのを見て、まさに地獄という言葉が当てはまるほ

どにひどい状況だった。」とおっしゃっていました。私は話を聞いて言葉が出ないほど驚いて、もう二度とこんなことは起きてはいけな
いとバの底から思いました。

他にも、原爆資料館では身体中にひどい火傷を負った人々の写真が映像として流れており、その姿は見ていられないほどでした。

原爆が落下した後、爆心地周辺には放射線という有害物質が充満し、爆心地付近にいたが、壁や塀に守られて軽傷で済んだ人、地下工場で仕事をしていて無傷だったというような奇跡的に無事だった人にも原爆の後遺症が現れ始め、亡くなってしまう人が大勢いました。薬もなく、治療法も分からない。原爆は目に見えない恐怖を残していったのです。

日本は今、核兵器禁止条約という条約に加盟しているため核兵器を所有していません。ですが、世界を見渡すと核兵器を所有している国があります。世界に存在している今すぐにでも使える核兵器は、長崎に落ちたものよ

りも威力の強いものが9615発もあるので
す。私は、核兵器が無くなれば、世界は今よ
りもっと平和になり、戦争もなくなるのでは
ないかと思います。しかし、それが叶うこと
はまだまだ先になります。それなら、身近な
人からでも平和の大切さについて伝えていく
ことが、平和大使として、私ができる数少な
い役目だと思います。

16

平和大使長崎派遣

河原塚中学校 一年 北野 緒泉

私が平和大使として長崎に行、て学んだ事は、大きく二つあります。一つ目は、一九四五年、八月九日の出来事です。二つ目は、現在のこと、これからのことです。

原爆のことについて、被爆者の二(瀬)清一郎さん・マハティール・モハメドさんという方々から話を聞きました。一九四五年、八月九日、午前十一時二分、アメリカ軍のB29により、長崎に一発の原子爆弾が投下されました。原爆が投下された時の爆心地の温度は三千度から四千度とものすごい高温で、爆風は、四百四十メートルにも達したそうです。

八月六日、午前八時十五分、同じく広島で原子爆弾が投下されました。長崎に投下された原爆は「アトム」と言い、広島に投下された原爆よりも強力なものでした。「アトム」というた。た一発の原子爆弾により、一瞬で、何万人もの人が犠牲となり命を落としま

した。この一瞬だけでなく、その後も被爆者の方々は、吐き気、嘔吐、下痢、脱毛、出血などの症状がでる後遺症を患い、多くの方が亡くなりました。しかし、今でも後遺症で苦しめられている方々がいます。こういう事が起（こ）いてもなお、世界から核兵器は消えることなく増えていく一方で、現在は約一万二千発以上の核兵器が存在しています。これらの核兵器が使われないう、長崎を最後の被爆地にと国際連合で活動されています。

このような話を聞いて、戦争の悲惨さや命の尊（た）さを知ることができ、より平和への考えが深まりました。また、今のよう暮らしも当たり前前（まえ）ではないことを知り、簡単ではないけれど、いつかこの暮らしが私たちの当たり前とな（な）り、平和にな（な）ってくれることを願（ねが）っています。

命の大切さを伝える

新松戸南中学校 1年

鈴木 辰長

私は平和大使長崎派遣を通して平和の大切さや命の尊さを学びました。長崎の景色を最初見た時、綺麗な青空と美しい街並みがありました。でもこの幸せな毎日が八十一年前の八月九日に奪われてしまった、その光景を想像するととても悲しかったです。

平和大使長崎派遣を通して印象に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、二日目に訪れた原爆資料館です。原爆資料館には目を疑うような展示がたくさんありました。熱線の影響で肌がただれている少年が黒焦げになってしまった子供、放射線の影響で一部が原爆ケロイドとなっている男性の写真など原爆の威力がどのくらい悲惨なものだったのかと思い、胸が痛くなりました。さらに、永遠に一時二分で止まっている時計が被爆前後の長崎の町を比べて

20 × 20

いる物など、原爆が投下され、自分の大切な物が奪われてしまったという事実と向き合いながらもその事実を語る被爆者の勇気が伝まりました。そしてこのようなことが八十年前の八月九日にあったのかと思うと二度とこんなことはしてはいけないと強く思いました。

次に私が印象に残ったことは、青少年ピースフォーラムに参加したことです。青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話や被爆疑似体験・違いとは何かについて考えることなど様々な体験をして、平和の大切さや命の尊さをより深く学びました。

被爆疑似体験では、自分の大切な物や人をカードに書き、実際の戦争を体験しました。空襲警報や徴兵令など戦争が激化していく中で大切な物や人を書いたカードがどんどん失われていき、最後は何もなくなってしまうしました。私はこのことを体験し、とても悲しくなりました。さらに被爆疑似体験では、光や音を使って当時の状況を再現していました。

急に暗くなったと思っ、たら光とともに大きな音がしてとても恐怖を感じました。しかし被爆をした当時の人たちは被爆疑似体験では表せないぐらい怖い思いをしていると思うと、核兵器を、二度と使ってはならない、と思いました。

被爆体験講話では被爆者の一人である三瀬清一郎さんの話を聞きました。三瀬さんは当時十歳で爆心地から三、六キロの屋内で被爆しました。三瀬さんを含む家族八人は無事でした。しかし、三瀬さんの当たり前だ、た生活は一瞬にして奪われてしまいました。空襲が相次いでおこっていた時や戦争が激化してまた時は夜なども安全に過ごせる日々は少なか、たそうです。私に置き換えてみるとありえない事だったので驚きました。でも今を生きている私たちは安全に生活もできるし、安全に眠れるところだ、であるし、ご飯も食べられます。今までは普通に寝ていた夜や平和な毎日は当たり前のようで当たり前ではない

ことがわかりました。三瀬さんは「平和は人類共有の世界遺産です。」とおっしゃっていました。私は誰もが平和を望んでいると思います。

三瀬さんの話が原爆資料館、青少年ピースフォーラムなどを通してこの世界を平和にするにはまず初めに「価値観の違いを認め、互いを尊重しあうこと」が大切だと学びました。

年々被爆者の方たちの年齢層は上がってきて、今年で平均八十六歳に達しました。そして、原爆の悲惨さが命の尊さを語る被爆者の方々は減ってきています。しかし核兵器という兵器によってたくさんの方たちの命が奪われた記憶は風化させてはいけないと思います。だからこそこのような貴重な経験をさせてもらったことを忘れずに当たり前ではない一日一日を大切にしてください。たくさんの方たちに伝えていきたいです。

最後にこのような貴重な経験をさせてくだ

さりありがとうございました。

伝えていくこと

松戸市立金ヶ作中学校 2年

竹田 和生

「ピカッ」1945年8月9日11時2分
長崎に一つの爆弾が落とされました。その爆
弾は太陽のように光り、約4000度の熱風
を長崎にもたらしました。1945年12月
までに亡くなられた方は73884人、負傷
者は74909人に上り、当時の長崎の人口
24万人の半分以上が犠牲になりました。

私は、戦争について本や映画を通して知っ
ていることはあったものの、実際に戦争を経
験した方の声や、当時の様子を自分の目で見
たことはありませんでした。だからこそ、直接
戦争の恐ろしさを感じ、周囲の人たちに伝え
ていければと思い、平和大使長崎派遣を希望
しました。

そんな自分にとって、一番印象に残っている
場所があります。それは、原爆資料館です。
原爆資料館では、写真や遺品を見て、当時の

20 × 20

人々の苦しみや大きな悲しみを知りました。
展示の中には、焼け焦げた衣服や溶けにガラス類、壊れた日用品などがあり、当時そこにあったはずの生活が一瞬にして奪われたことを想像し、胸が苦しくなりました。

また、当時被爆した子供たちが書いた被爆体験日記も心に残っています。妹が家の下敷きになっ たことを書いたもの、どうしても水が飲みたくてたまらない少女が、油が浮いた水を飲んだこと、お母さんを失ってしまった少年のことなどが書かれていました。それらの日記は、原爆資料館にあるどんなものよりも私の心に刺さりました。他にも、「ファットマン」の模型や、ガラスと人の骨が溶けてくっついてしまったもの、川の名前が記された金属製のプレートが曲がってしまったものなどがありました。

「ファットマン」とは、長崎に落とされた原子爆弾につけられた名前です。長さが3.25m、直径1.52m、重さ4.5tの爆弾です。実

20 × 20

際に模型を見ると、予想よりはるかに大きな爆弾でした。火薬を使った爆弾2万1千も相当の威力だと書いてあり、広島の実爆が1万5千も相当だ、たため、二つの爆弾でも威力が違ふことがわかりました。また、金属製のプレートは実際に触ることができたので、厚さ約10cmはあるプレートが途中から斜めに曲がっている部分を触ってみました。人の力では全く動かさそうもないこのプレートが、きれいに曲がっていることが手から伝わってきました。一つの爆弾が何万人もの命を奪い、大地を無に帰し、絶望を与えた。そう思うと今生きていられることがこんなにも幸せなことなんだと、平和の大切さを実感しました。

もう一つ、印象に残っていることがあります。それは青少年ピースフォーラムで行われた、被爆経験者である三瀬清一郎さんのお話です。三瀬さんは当時10歳で、爆心地から3.6kmの屋内で被爆しました。爆弾が落ちた時のことを「ピカッと光、てドッと落ちた」

と話していました。その「ピカッと光る」と話された時の迫力が凄まじく、私の頭の中に光が走りました。三瀬さん一家は無事でしたが、食糧難に見舞われていたそうです。当時、畑仕事は敵に狙われてしまうため、畑で育てるサツマイモなどはめったに食べられる物ではなく、カボチャなどの育ちが早い食べ物を家などで育てて食べていたそうです。それを聞いて、私がずっとカボチャだけを食べていたら耐えられない、今当たり前に様々な食材を食べられることは当たり前のことではなかったと気づきました。

三瀬さんが当時通っていた学校では救護活動が行われており、溺死の人、大火傷を負った人などが次々と運ばれていました。救護活動が間に合わず、次々と亡くなり、校庭で焼かれていたとおっしゃっていました。もし自分がそんな状況に置かれていたら、もう学校が怖くなり行けなくなると思いました。

三瀬さんの話を聞いて心に残った言葉があ

ります。それは、「平和は人類共通の世界遺産です。」という言葉です。私はこの言葉を聞いて、平和とは人類共通の貴重な宝物であり、大切にしていかなければならないものなのだと思います。

今、被爆経験者の平均年齢は86歳になりました。私たちが被爆経験者の方の話を聞くことが出来るのも、これが最後になるかもしれません。だからこそ、次の世代の人たちに戦争の恐ろしさ、原爆の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、世界中が手をとり合って平和を守っていかなくてはならないと思います。今回私が長崎で学んだことを、多くの人に語り継いでいけるように努力していきたいと思います。

長崎で学んだこと

松戸市立和光中学校 2年

釣巻 穂愛

私が平和大使に参加しようと思、たこ、か
かは、2つあります。1つ目は、授業で
学ぶことあり、現地に付き実物を見てより学
びを深めたいと思、たからです。たとえば、
他校の人たちと学ぶと、どう捉え、どう思う
のかが知れて新しい発見が増えると思、たか
らです。2つ目は原爆がどれほど悲惨なその
かを色々な人たちに伝えていくに、と思、た
からです。なぜなら、少しでも多くの人に原
爆の怖さと悲惨さを知ってもらい、戦争のな
に世界に少し近づけたらと思、たからで
す。

1月日は、出発式をし、長崎に向か、まし
た。長崎についたら予定されてた立山防空
壕には、時間の関係で行けませんでしたが、
眼鏡橋の見学はできました。眼鏡橋は想像し
ていたのより、綺麗なアーチ型で、原爆が投

20 × 20

下された県だとは思えばいいほどでした。

2日目は、バスの窓から、半分しか残って
いない、一本島屋を見学し、原爆落下中心地
や城山小学校、平和公園に行き、みんなで思
いを込めて作成した千羽鶴を原爆資料館へ献
納後、原爆資料館を見学し、被爆体験講話を
聞きました。ここの体験をし、私は一本島
屋は原爆に耐えて今でも残っていることに、
すごいと感じました。

3日目は、平和祈念式典へ参列し、青少年
ピースフォーラムで原爆の話を聞いたり原爆
が起ると、どうなるのが体験して、出島が
自由学習をしました。

4日目は、松戸に向かい、帰京報告会とし
て解散しました。

この4日間を通して思っていることは、3つあ
ります。1つ目は、原爆が速く、怖く、怖
いものだということを改めて感じました。2つ目は
もっと、たくさんの人に原爆の怖さを知って
えらい戦争のなにもに思っているなと感じました。

た。3つ目は、長崎を最後の爆心地にしたい
と思っただ。なぜなら、誰も特をしないの
は無意味にたくさんの人たちが亡くなるの
は、おかしいと思っただからである。これらの経
験を生かして今後の学校生活や日常生活に生
かしたいである。

長崎での体験を通して

松戸市立小金北中学校 2年

竹内 奈生

私は松戸市の平和大使として、8月7日から8月10日まで長崎を訪れました。今回の派遣は、戦争や原爆の悲惨さを学び、平和の大切さを考えるとても貴重な機会となりました。出発前は「自分に何ができるのだろう」という不安と、「現地でしっかり学びたい」という期待が入り混じった気持ちでしたが、実際に長崎で過ごした4日間は、そのどちらの気持ちも大きく変えてくれました。

長崎原爆資料館では、原爆の威力や被害の様子を示す資料や写真を目にしました。焼け焦げた衣服、熱で溶けてしまったガラス瓶、子どもが使っていたお弁当箱など、どれも一瞬にして日常を奪われたことを物語っていました。その中でも特に印象に残っている資料が当時9歳だった少女の手記です。「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらの

ようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました」。これは手記の一部を抜粋したものです。このあぶらのようなものとは、放射性物質です。そのうえそれを知らずに飲んでしまったと考えると胸が痛くなりました。

また、被爆者の方のお話を直接聞いたことは、私にとって忘れられない体験です。その方は当時小学生で、爆心地から3.6 kmの屋内で被爆し、家の状況はひどい有様だったが、家族8人は無事だったそうです。その方のお話で一番心に残っていることは、数日後に学校の様子を見に行ったときの話です。被害が深刻だったため、学校は救護所となっており、どんどん被害にあった人が運ばれてきたそうです。また藁や水も足りておらず、たくさんの方が亡くなり、その遺体は校庭で焼かれ、まさに地獄だとおっしゃっていました。

さらに、平和公園での平和祈念式典にも参加しました。大勢の人々が静かに祈りをささ

げ、原爆で亡くなった方々の冥福と世界の平和を願う姿はとても印象的でした。黙祷の間には私も目を閉じ、犠牲となった人々の思いを心に刻みました。私の心にも「二度と同じことを起こしてはいけない」という気持ちが強くなりました。多くの人が同じ思いを持つことで、きっと平和は守れる、そう感じた1分間でした。

この派遣で学んだことは、平和をつくるのは国や大人だけの仕事ではなく、私たち一人ひとりの気持ちや行動も大切だということです。家族や友達を思いやること、ケンカを避けること、違いを受け入れること。そうした小さな積み重ねが、大きな平和につながるのだと学びました。私はこの体験を学校や家で伝え、平和について考えるきっかけにしたいと思います。今回、このような貴重な体験ができ、とても感謝しています。長崎で見聞きし、感じたことを忘れず、これからの生活につながることを続けていきたいです。

平和への想い

光英VERITAS中学校 2年

大久保 明咲

1945年8月9日11時2分。長崎の上空で炸裂した1発の^{げんしばくだん}原子爆弾は、当時の人々の日常、幸せ、未来を一^{いっしん}瞬にして^{うば}奪い^さ去りました。原爆「ファットマン」の^{ねぷう}熱風と^{ばくふう}爆風は、人々や家などの建物も吹き飛ばし、長崎の美しい景色を壊していきました。目に見えない放射線を浴びた人々は、戦争が終わった後も後遺症に苦しみました。その傷跡は、80年経った今もなお癒^いえることはありません。

原子爆弾という兵器は、恐ろしいという言葉だけでは足りないほど^{ざんいん}残忍で^{ざんこく}残酷なものです。全てを一^{いっしん}瞬で^{うば}奪い、^{こわ}壊してしまいます。それなのに、世界には今もなお12000発以上の核兵器が残っています。核保有国も含め、今も世界のあちこちで戦争が行われています。また新たにどこかの国が^{ひばくち}被爆地になっ、てしまいかもしれない、そんな恐ろしい未来が想像

できてしまう現状では、真の平和というものは訪れないのではないのでしょうか。

長崎を訪れた4日間、私たちは^{せいしょうねん}青少年ピース^{しやましようが}フォーラムへの参加、平和公園や城山^{こう}小学校を訪れたり、平和式典へ参列したり、さまざまな貴重な経験をさせていただき、平和について学ぶことができました。青少年ピースフォーラムでは、^{ひばくしゃ}被爆者の^{みせ}三瀬^{せいいちろう}清一郎さん^{ひさん}から直接^{うかが}お話を伺うことができ、当時の悲惨さや苦しみを感じました。原爆を落とされた8月9日は夏休み、家族と共に過ごしている人が多い中での出来事でした。

今、私たちが夏休み明け友達と話すことといえば、「夏休み何をしたの?」「宿題終わった?」など、そんなたわいのない平和なものだと思います。でも、この時代は違います。「よう生きとった。よかったなあ。」そう言って、生きていることに感謝をしたのだそうです。同じ教室にいた仲間がいなくなってしまうことが当たり前の世界でした。^{きゅうじや}救助場にな

っていた学校には、たくさんの人が運ばれて
きました。救護^{きゅうご}が間に合わず、次々亡くなっ
てしまった人が校庭で焼かれる様を嫌^{いや}という
ほど見せられました。「水を、水を」と叫^{さけ}び、
苦しみのあまり「殺してくれ。」と叫^{さけ}ぶ人々の
姿を見ることしかできず、これが地獄^{じごく}なのか、
と思ったそうです。戦争が終わり、平和にな
ったと思われた後も被爆者^{ひばくしゃ}の方々の戦いは終
わっていませんでした。根拠^{こんきょ}のない偏見^{へんけん}や差
別、経済的な生活の苦しさ、怪我^{けが}の後遺症^{こういしょう}、
そして放射線^{きょうい}の恐怖。「被爆者の子供は異常
な子が生まれる。」そんな本当かどうかも分か
らない噂^{うわさ}が広がり、被爆者ということを隠^{かく}し
て、就職や結婚をする人も少なくなかったよ
うです。

実は、私の祖母の兄姉^{けいし}は、長崎で被爆を経
験しています。被爆二世をつくらないように
と結婚^{ひか}を控えたり、若くして亡くなったりと、
深い苦しみを背負っていたそうです。今まで
私はこの話を知りませんでした。戦争を経験

した人の中には、その頃のことを思い出すのも辛く、語りたくないと思う方もいらっしゃるようですが、私の祖母もその1人だったようで、今まで戦争の話聞いたことがなかったのです。今回の長崎派遣をきっかけに、出発前に当時の話を少し聞くことができました。この長崎派遣がなかったら、一生聞けなかった話かもしれないと思うと、より一層ありがたい経験となりました。

原爆が残した傷跡、被爆者の方からのお話、いろいろなことを見て、聴いて、感じて、苦しみを抱えた方が数えきれないほどいらっしゃることを知り、命の尊さ、平和の大切さを改めて強く感じています。やはり、核兵器は世界から無くさなくてはいけない、これ以上苦しむ人を出してはいけないと、改めて考えさせられました。核兵器を無くすというのはとても難しく、簡単なことではないかもしれませんが、それでも、諦めず^{あきら}に、この想いや原爆の恐ろしさ、平和の大切さを私たちが少し

ずつでも世界へと発信していけば、何か変わるかもしれません。被爆者のいない時代が訪れようとしている今だからこそ、彼らから聞いたこと、彼らの想いを受け継いで次の世代へと私たちが伝えていくこと、これが大切なのではないかと、今回の長崎派遣で感じました。私たちは、被爆者の方から直接お話を聴ける最後の世代だといわれています。それがどんなに貴重で大切なことなのか改めて感じるとともに、直接伺ったお話を伝え続けていくことが私たちの使命だと思っています。

美しい長崎の街を一瞬にして焼け野原に変えてしまった憎^{にく}き原子爆弾、それでも80年経った現在の長崎は大変美しく、自然^{しぜん}溢^{あふ}れた力強い景色が広がっています。私たちの手は、平和を壊すためではなく、平和な世界を作り、守るためにあります。「長崎を最後の被爆地に」という想いを胸に、平和への想いを伝え続けるとともに、平和のためにできることを模^も索し続けたいです。

当たり前と思える贅沢さ

専修大学松戸中学校 2年

芳野 桜

私は今年の8月7日から8月10日まで、原爆の被災地の一つである長崎へ行ってきました。この4日間で、多くの学びを得ることができました。特に印象に残ったのは、大きく分けて3つです。1つ目は、平和案内人の方々に被爆に関する建造物のガイドをしてもらったことです。案内してもらった下の川では、原爆当初に水を求めて川に入った人が大勢いたそうです。水を求める人々は、原爆によって体の水分を失った、やけどした体を冷やしたいなど様々な背景がありました。ですが、その人々は、生きることができませんでした。川の中には放射線を含んだ油や人の死体などがあつたからです。熱い体でなんとか生きる希望であつた川に行っても、生きれないと気付いた時の絶望を想像しただけでも心が痛みました。2つ目は原爆資料館で展示されていた数

20 × 20

多くの展示品です。そこでは原爆によって焼かれた衣服や米が炭になったお弁当箱、顔がクロイドになってしまった方の写真など、どれも原爆そして戦争の悲惨さを物語るようなものでした。他にも2人の少女が火葬される絵もありました。ですが、私が注目して見たのは2人の少女が着物を着ていることです。2人の少女の親たちが最期だから戦時中には着れない、色あざやかな着物を着させて、おめかしを少女たちにした、という話を平和案内人の方から聞いて、戦争中の息苦しさを感しました。3つ目は、青少年ヒー・スフォーラムのプログラムの一つである被爆者体験講話の三瀬さんの話です。当時10歳の三瀬さんの夢は、「白いご飯をお腹いっぱい食べること」だったそうです。今を生きる私たちの夢は、長期的に考えるものだと思います。ですが、戦争中では今日を生きることさえ、精一杯だと感じ、今の私たちはとても贅沢な日々を送れていると思いました。そして、そんな贅沢な暮らしを当たり

20 × 20

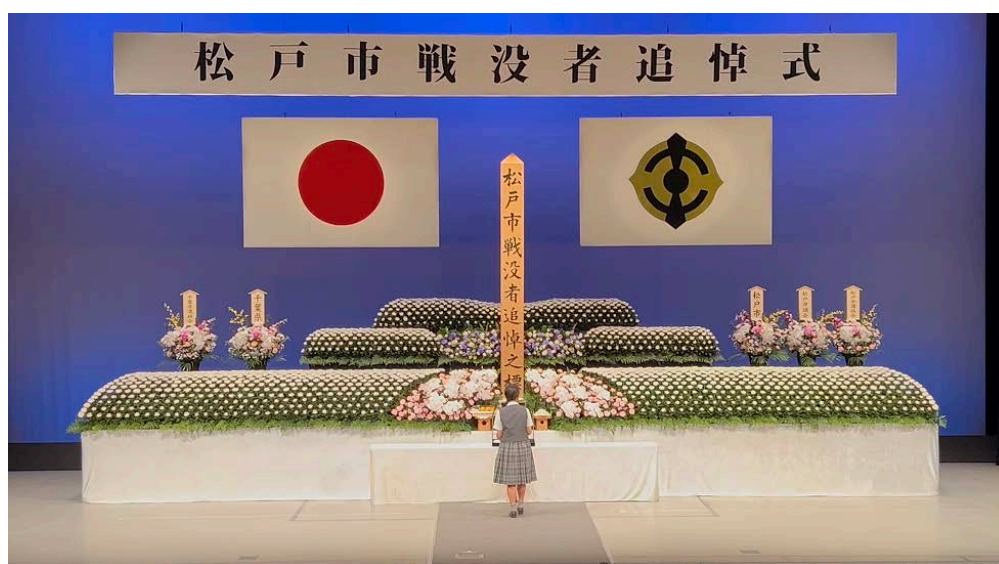
前のように過ごせている日々がありがたいと思います。ですが、このような生活を私たちができているのに対し、世界では各地で戦争が起っています。そして、今ではさらに数千倍もの威力を増して、原爆から核ミサイルなどと名前を変えながら、今日にも世界で残り売っています。そのような物が世界中に落とされ始めたら、あっという間に数多くのものを失ってしまうことになるでしょう。果たしてそれで良いのでしょうか？得るものは悲しみのみとなります。そんなことになってしまう前に私たちにもやれることがあるはずです。それは、「『戦争をしない』という心を持ち続けること」です。このような人を増やしていけば将来的に戦争はしなくなると思います。第一歩として、私は長崎で学んだことを持ち帰り多くの人に戦争の悲惨さを広めていき、世界中の人が夢を持ち目指せるような世界にしていきたいです。

派遣後の活動について

・令和7年9月27日（土）松戸市戦没者追悼式



〈新松戸南中学校 鈴木 辰長〉



〈専修大学松戸中学校 芳野 桜〉



〈献花の様子〉



市ホームページ(松戸市戦没者追悼式)

※学校から提供いただいた資料の一部を載せています

・ 学校での発表

小金北中学校 竹内 奈生

令和7年9月1日（月）

始業式に全校放送で発表



和名ヶ谷中学校 釣巻 琉愛

令和7年9月8日（月）

全校放送で発表



金ヶ作中学校 多田 和生

令和7年9月12日（金）

全校放送で発表



古ヶ崎中学校 松原 和佳子

令和7年11月13日（木）

全校集会で発表



小金南中学校 中山 優生
令和7年9月25日(木)
全校放送で発表



新松戸南中学校 鈴木 辰長
令和7年10月15日(水)
全校集会で発表



河原塚中学校 北野 緒泉
令和7年11月5日(水)
全校集会で発表



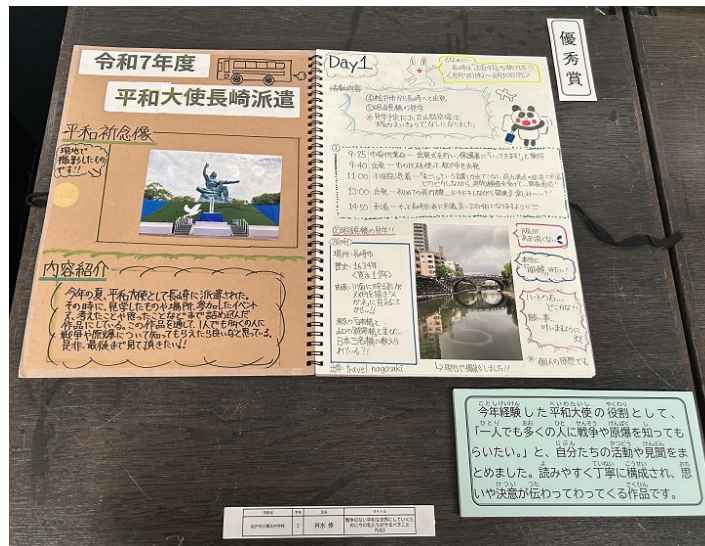
六実中学校 柴崎 百寧
令和7年11月14日(金)
全校集会で発表



・その他の活動

第五中学校 舩水 倅

「第10回松戸市立博物館アワード」歴史に関する自由研究部門で優秀賞を受賞
「戦争のない平和な世界にしていくなために今の私たちがやるべきこと PEACE」



長崎平和宣言

以下、長崎市ホームページから抜粋

長崎平和宣言

1945年8月9日、このまちに原子爆弾が投下されました。あの日から80年を迎える今、こんな世界になってしまうと、誰が想像したでしょうか。

「武力には武力を」の争いを今すぐやめてください。対立と分断の悪循環で、各地で紛争が激化しています。

このままでは、核戦争に突き進んでしまう。そんな人類存亡の危機が、地球で暮らす私たち一人ひとりに、差し迫っているのです。

1982年、国連本部で被爆者として初めて演説した故・山口仙二さんは、当時の惨状をこう語っています。

「私の周りには目の玉が飛び出したり 木ギレやガラスがつきささった人、首が半分切れた赤ん坊を抱きしめ泣き狂っている若いお母さん 右にも 左にも 石ころのように死体がころがっていました。」

そして、演説の最後に、自らの傷をさらけ出しながら、世界に向けて力強く訴えました。

「私の顔や手をよく見てください。世界の人々 そしてこれから生まれてくる子供たちに私たち被爆者のような 核兵器による死と苦しみを例え一人たりとも許してはならないのであります。」

「ノー・モア・ヒロシマ ノー・モア・ナガサキ
ノー・モア・ウォー ノー・モア・ヒバクシャ」

この心の底からの叫びは、被爆者の思いの結晶そのものです。

証言の力で世界を動かしてきた、被爆者たちの揺るがぬ信念、そして、その行動が評価され、昨年、日本被団協がノーベル平和賞を受賞しました。日本被団協が結成されたのは、1956年。心と体に深い傷を負い、差別や困窮にもがき苦しむ中、「自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おう」という結成宣言をもって、長崎で立ち上がりました。

「人類は核兵器をなくすことができる」。強い希望を胸に、声を上げ続けた被爆者の姿に、多くの市民が共感し、やがて長崎に「地球市民」という言葉が根付きました。この

言葉には、人種や国境などの垣根を越え、地球という大きな一つのまちの住民として、ともに平和な未来を築いていこうという思いが込められています。

この「地球市民」の視点こそ、分断された世界をつなぎ直す原動力となるのではないのでしょうか。

地球市民である、世界中の皆さん。

たとえ一人ひとりの力は小さくとも、それが結集すれば、未来を切り拓く大きな力になります。被爆者は、行動でそう示してきました。

はじめの一步は、相手を知ることです。対話や交流を重ね、互いに理解し、小さな信頼を重ねていく。これは、私たち市民社会の大きな役割です。

私たちには、世界共通の言語ともいえるスポーツや芸術を通じて、また、発達した通信手段を使って、地球規模で交流する機会が広がっています。

今、長崎で、世界約8,500都市から成る平和首長会議の総会を開いています。市民に最も身近な政府である自治体も絆を深め、連帯の輪を広げています。

地球市民として、共感と信頼を積み重ね、平和をつくる力に変えていきましょう。

地球市民の一員である、すべての国の指導者の皆さん。

今年は、「戦争の惨禍を繰り返さない」という決意のもと、国連が創設されてから80年の節目でもあります。今こそ、その礎である国連憲章の理念に立ち返り、多国間主義や法の支配を取り戻してください。

来年開催される核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議は、人類の命運を左右する正念場を迎えます。長崎を最後の被爆地とするためには、核兵器廃絶を実現する具体的な道筋を示すことが不可欠です。先延ばしは、もはや許されません。

唯一の戦争被爆国である日本政府に訴えます。

憲法の平和の理念と非核三原則を堅持し、一日も早く核兵器禁止条約へ署名・批准してください。そのためにも、北東アジア非核兵器地帯構想などを通じて、核抑止に頼らない安全保障政策への転換に向け、リーダーシップを発揮してください。

平均年齢が86歳を超えた被爆者に、残された時間は多くありません。被爆者の援護のさらなる充実と、未だ被爆者として認められていない被爆体験者の一刻も早い救済を強く要請します。

原子爆弾で亡くなられた方々とすべての戦争犠牲者に、心から哀悼の誠を捧げます。

被爆80年にあたり、長崎の使命として、世界中で受け継ぐべき人類共通の遺産である被爆の記憶を国内外に伝え続ける決意です。永遠に「長崎を最後の被爆地に」するために、地球市民の皆さんと手を携え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に力を尽くしていくことをここに宣言します。

2025年（令和7年）8月9日

長崎市長 鈴木 史朗

ことばの解説

1. 山口 仙二

1945（昭和20）年8月9日、当時14歳だった山口さんは、学徒動員先の三菱兵器製作所大橋工場（爆心地から約1.1 km）で被爆し、全身と顔に大やけどを負いました。

1955（昭和30）年に第1回原水爆禁止世界大会が広島市で開催されたのを機に、反核・平和運動に身を投ずるようになり、長崎原爆被災者協議会（長崎被災協）や日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）2で解説）等の創立に尽力されました。

1982（昭和57）年、日本被団協代表委員だった山口さんは、ニューヨークの国連本部で開かれた第2回国連軍縮特別総会に被爆者として初めて演説を行い、「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ、ノー・モア・ウォー、ノー・モア・ヒバクシャ」と訴えました。

生涯にわたり被爆者の健康や生活の向上、核兵器廃絶に尽力をされ、2013（平成25）年に生涯の幕を閉じられました。82歳でした。



2023年秋に長崎原爆被災者協議会内で新たに見つかった故・山口仙二氏の国連での演説原稿（提供：長崎原爆被災者協議会）

2. 日本被団協

1966（昭和31）年8月に結成された広島・長崎の被爆者でつくる全国組織である日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）は35都道府県の団体から構成され、長崎では長崎原爆被災者協議会（長崎被災協）が活動しています。「ふたたび被爆者をつくるな」を合言葉に、半世紀以上にわたり「核兵器廃絶」や「原爆被害の国家補償」を求めて活動し、「核兵器禁止条約」や「被爆者援護法」の制

定にあたり重要な影響を与えました。

2024（令和6）年12月10日、ノーベル平和賞を受賞しました。ノーベル委員会は、被爆者が自らの壮絶な体験を語り、核兵器廃絶を訴えることで、核兵器の使用は道徳的に許されないとする「核のタブー」の確立に貢献したと評価する一方で、核兵器使用のリスクの高まりや核軍拡競争の激化などにより「核のタブー」が圧力にさらされていると指摘しています。日本被団協の活動を称え、今こそ被爆者の訴えに耳を傾けるべきと警鐘を鳴らしています。

3. 地球市民

現在の国際社会には、国境を越えて全世界で取り組まなければならない問題が多く存在しています。地球市民とは、人種、国籍、思想、歴史、文化、宗教などの「違いを乗り越え、誰もがその背景によらず、人として尊重される社会の実現」を目指して活動する人々を示す造語です。地球市民は市民としての帰属を国家ではなくより広い概念に求めています。

このように同じ地球に住む市民という考えに立ち、すべての人々の生活の向上を目指していくことが大切になっています。

4. 市民社会

近年、貧困、人権、環境、軍縮といった地球規模の課題において、NGO（非政府組織）やNPO（非営利組織）、民間財団などの市民の組織が大きな役割を果たしており、こうした組織が公共を担う社会を「市民社会」といいます。

5. 平和首長会議

1982（昭和57）年、核兵器廃絶と世界恒久平和を目指して結成された世界の都市による平和団体です。会長は広島市長、副会長は長崎市ほか10都市が務めています。

現在、166か国・地域の約8,500都市が加盟しており、「核兵器のない世界の実現」「安全で活力のある都市の実現」「平和文化の振興」の3つの目標のもと、世界各地で様々な活動を行っています。

ことばの解説

ます。そして4年に1度、加盟都市が集まって、行動計画などの重要な事項について話し合う総会を広島市と長崎市が交互に開催しています。

今年は8月7日から10日まで長崎市で「核兵器のない世界を目指して～地球市民として描く平和な未来～」を基調テーマに、第11回平和首長会議被爆80周年記念総会が開催されています。

6. 国連（国際連合）

何千万もの命が奪われた第二次世界大戦の惨禍を二度と繰り返さないという国際社会の強い決意のもと、1945（昭和20）年10月、51か国の加盟によって設立されました。世界の平和と安全の維持、そして国際協力の促進を目的とする国際機関です。

現在の加盟国は193か国にのぼり、本部はアメリカ・ニューヨークに置かれています。国連には、総会、安全保障理事会を含む6つの主要機関が設けられています。

国連の活動を支える重要な理念のひとつが、「法の支配（Rule of Law）」です。これは、特定の権力者が自らの意志でルールを決めたり命令を下したりする「人の支配」に対抗し、法の統治、法の優位、法の下での平等といった「法の原則」に基づいて、平和、開発、民主主義の実現を目指す考え方です。

7. 国連憲章（国際連合憲章）

1945（昭和20）年につくられた国連憲章は、全19章、111条から構成される国連の基本文書で、加盟国の権利や義務を規定するとともに、国連の主要機関や手続が定められています。国際社会における基本的なルールや原則を形成していることから、国際社会の憲法と位置付けられています。

国連憲章の前文には、「戦争の惨害から将来の世代を救い」という言葉が用いられ、国連の理念である戦争根絶、基本的人権の尊重、人民の同権、国際協力、生活水準の向上などが記されています。

8. 核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議

核兵器不拡散条約（NPT）は、核保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的につくられた条約で、1970（昭和45）年に発効し、「核不拡

散」「核軍縮」「原子力の平和的利用」を三本柱としています。

2003（平成15）年1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエル、南スーダンの4か国を除く191か国・地域が加入しています。

また、NPTでは条約が定める義務の履行状況を確認し、締約国の取組みを強化するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。再検討会議では全会一致で最終文書の合意を目指しますが、直近2回（2015年と2022年）の再検討会議では合意に至らず、核軍縮や核不拡散の方策を示すことができませんでした。次回の再検討会議で合意できなければ、半世紀以上にわたるNPT体制への信頼が損なわれ、崩壊の危機が危ぶまれます。次回の再検討会議は、2026（令和8）年4月から5月にかけてニューヨークで開催されます。

9. 非核三原則

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つくらない」「持ち込ませない」という戦争被爆国である日本政府の3つの原則のことです。

1967（昭和42）年12月、当時の佐藤栄作首相が国会で表明しました。

1971（昭和46）年11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針として、国会の意思を決める決議が行われました。

10. 核兵器禁止条約

核兵器は一旦使用されれば、取返しのつかない甚大な被害を人間や環境に与えます。それは戦争での使用だけでなく、核兵器が存在する限り、誤って使われたり、テロなどに使われたりする危険性があります。核兵器不拡散条約（NPT）で約束された核軍縮が進まない状況に不満を持つ国々の間で、核兵器を法的に禁止しようとする動きが、2010（平成22）年頃から強まりました。

そのような核兵器を持たない国々の主導のもと、三度にわたる核兵器の非人道性を考える国際会議の開催などを経て、2017（平成29）年7月、国連

ことばの解説

加盟国の6割を超える122か国・地域が賛成し、核兵器禁止条約が採択されました。

条約の前文には「被爆者の苦しみと被害を深く心に留める」とあります。被爆者の「私たちの経験をもう、誰にもさせたくない」という願いを国際社会がしっかりと受けとめました。

しかし、採択されただけでは、条約は力を持ちません。本当に力を持つためには、それぞれの国の議会等が国内法にしたがって条約を認め、締結する意志を最終的に決定しなければなりません。これを「批准」といいます。

2020（令和2）年10月24日、批准した国が発効要件の50か国に達し、その90日後の2021（令和3）年1月22日に発効（国際法として効力を持つこと）しました。

なお、条約は締約国（条約に正式に入った国）が話し合う会議を定期的に開催することを定めており、これまでに3回開催されました。2026（令和8）年11月から12月にかけて、条約の運用と条約の目的の達成についての進捗状況を検討するため、第1回再検討会議がニューヨークで開催されます。

1.1. 北東アジア非核兵器地帯構想

地域の国々が条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束した地域のことを「非核兵器地帯」といいます。

条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることで、核兵器の役割を減らし、核兵器を開発・保有する動機をなくしていくことにもつながります。

地球の南半球は、1967（昭和42）年のラテンアメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器条約）によりすでに陸地のほとんどが非核化されています。

北半球でも、1998（平成10）年にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009（平成21）年には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非

核兵器地帯条約が発効しています。

「北東アジア非核兵器地帯」には、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものなどがあります。

条約が実効力を持つためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核兵器国（アメリカ、ロシア、中国）が、3か国を核兵器で威嚇や攻撃をしないと約束することが必要になります。

「朝鮮半島の完全な非核化」が明記された2018（平成30）年の米朝共同声明などを活かしつつ、地域国間の信頼醸成を図り、北東アジア全体の平和を実現するために日本政府が果たすべき役割は大きいといえます。

北東アジア非核兵器地帯構想



Or [世界の非核兵器地帯はこちら](#)

1.2. 核抑止

相手国が攻撃した場合、核兵器で反撃するという姿勢をみせることによって相手国の攻撃を思いとどまらせようとするのを、核兵器による抑止（核抑止）といいます。核保有国の多くは効果的な核抑止力を維持しようと、核兵器の能力向上に励み、核兵器がいつでも使える状態に置き、相手への脅しを続けています。しかし、この核抑止力が失敗したとき、あるいは事件や事故が起きたとき、甚大な被害がもたらされる危険性があります。

歴代平和大使名簿



～ 歴代平和大使名簿(長崎) ～

年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺	(第四中 2年)
	2	別宮 賢治	(第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと	(六実中 3年)
	4	片野 結依	(小金南中 1年)
	5	清水 のどか	(古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃	(新松戸南中 2年)
	7	清水 健人	(金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈	(新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実	(旭町中 3年)
	10	黒木 若葉	(聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介	(第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里	(第二中 1年)
	3	小幡 祐太	(第三中 1年)
	4	山田 政明	(第四中 1年)
	5	清水 彬奈	(第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子	(第六中 1年)
	7	増野 友梨奈	(小金中 2年)
	8	井山 陽菜	(常盤平中 2年)
	9	小林 美幸	(栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮	(六実中 1年)
	11	高島 里夏	(牧野原中 3年)
	12	西 志穂	(河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人	(根木内中 1年)
	14	四家 明宜	(金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華	(和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十二年(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏	(第一中 2年)
	2	吉田 彩乃	(第二中 1年)
	3	三橋 若奈	(第三中 1年)
	4	笹本 幸輝	(第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉	(第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美	(第六中 1年)
	7	神部 ちひろ	(小金中 2年)
	8	田中 萌加	(常盤平中 1年)
	9	高梨 望	(栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士	(六実中 2年)
	11	大山 祭	(小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣	(古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹	(牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人	(根木内中 1年)
	15	富永 由也	(河原塚中 1年)
	16	石井 拓海	(新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志	(金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子	(和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ	(旭町中 2年)
	20	新倉 花菜	(小金北中 1年)
	21	田村 陽香	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子	(専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加	(第一中 2年)
	2	発地 空介	(第三中 1年)
	3	岸 健太	(第四中 1年)
	4	宗像 未来	(第五中 1年)
	5	天野 七海	(第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒	(小金中 2年)
	7	井山 祥樹	(常盤平中 2年)
	8	加藤 円来	(栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子	(六実中 3年)
	10	坂本 実優	(小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美	(古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子	(牧野原中 2年)
	13	山田 真平	(河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太	(新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来	(金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友	(旭町中 3年)
	17	板倉 日向子	(小金北中 1年)
	18	張 敏	(聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆	(専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十四 年度(二〇二二年)	1	阿部 秀大	(第一中 2年)
	2	茂出来 美樹	(第二中 3年)
	3	小澤 美羅	(第三中 3年)
	4	笠原 卓斗	(第四中 1年)
	5	播磨 渚生	(第五中 3年)
	6	内海 渚	(第六中 1年)
	7	大津 みちる	(小金中 3年)
	8	小俣 さやか	(常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香	(常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美	(六実中 1年)
	11	宮本 龍一	(小金南中 3年)
	12	樋口 杏	(古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ	(牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽	(根木内中 2年)
	15	後藤 陽	(河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩	(新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき	(和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢	(和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗	(旭町中 1年)
	20	川村 香奈美	(小金北中 1年)
	21	石井 そら	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎	(専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十五年 度(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈	(第一中 1年)
	2	河野 圭吾	(第二中 1年)
	3	福田 友郁	(第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮	(第四中 1年)
	5	宮島 健吾	(第五中 3年)
	6	後藤 美菜	(第六中 3年)
	7	関川 美海	(小金中 2年)
	8	金澤 春樹	(小金中 1年)
	9	阿部 雅治	(常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀	(栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗	(六実中 1年)
	12	島田 悠	(小金南中 1年)
	13	大久保 愛深	(古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子	(古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正	(牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗	(牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗	(河原塚中 3年)
	18	平野 茜	(新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司	(和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真	(小金北中 1年)
	21	郡司 萌	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十六年 度(二〇一四年)	1	布川 恭大	(第一中 2年)
	2	白井 悠生	(第二中 2年)
	3	松本 優樹	(第二中 2年)
	4	本間 宏明	(第三中 2年)
	5	旗谷 吏紗	(第四中 3年)
	6	宮島 加奈子	(第五中 1年)
	7	植田 聖杜	(第六中 2年)
	8	合田 健太郎	(小金中 2年)
	9	早崎 諒	(常盤平中 2年)
	10	小井土 瑠芽子	(栗ヶ沢中 1年)
	11	望月 優衣	(六実中 3年)
	12	片野 玲奈	(小金南中 1年)
	13	和田 晴人	(古ヶ崎中 2年)
	14	對馬 悠介	(牧野原中 2年)
	15	井手 麟太郎	(根木内中 2年)
	16	樋口 明日香	(河原塚中 1年)
	17	斎藤 龍秀	(新松戸南中 1年)
	18	久保田 美咲	(和名ヶ谷中 2年)
	19	紀藤 菜桜	(旭町中 1年)
	20	渡邊 龍	(小金北中 1年)
	21	野中 利悦	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	築田 真理子	(専修大学松戸中 3年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十七年 度(二〇一五年)	1	服部 叶汰	(第一中 1年)
	2	瀬谷 恭平	(第二中 2年)
	3	長谷川 勇矢	(第三中 2年)
	4	朝生 蘭	(第四中 1年)
	5	田島 歩夢	(第四中 3年)
	6	佐藤 駿太	(第五中 1年)
	7	小林 優人	(第六中 2年)
	8	山下 優月	(第六中 2年)
	9	田崎 和	(常盤平中 1年)
	10	須藤 巧	(小金南中 1年)
	11	萩原 真央	(小金南中 1年)
	12	大久保 敦康	(古ヶ崎中 1年)
	13	倉重 はるか	(古ヶ崎中 2年)
	14	清水 智也	(牧野原中 2年)
	15	木村 史来	(牧野原中 1年)
	16	吉田 真帆	(河原塚中 1年)
	17	飯銅 千尋	(和名ヶ谷中 2年)
	18	井上 未来	(旭町中 2年)
	19	島岡 里帆	(小金北中 1年)
	20	藤井 友紀	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	山田 佳那	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	福島 有香	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成二十八年 度(二〇一六年)	1	梶原 望音	(第一中 1年)
	2	新井 しほり	(第二中 2年)
	3	山本 遥香	(第三中 2年)
	4	大住 春紀	(第四中 1年)
	5	塙 悠莉乃	(第五中 1年)
	6	三橋 世那	(第六中 1年)
	7	山崎 夏海	(小金中 2年)
	8	千葉 京香	(常盤平中 1年)
	9	須藤 未来	(小金南中 1年)
	10	坂本 聖	(小金南中 2年)
	11	相馬 結子	(古ヶ崎中 1年)
	12	中村 莉子	(古ヶ崎中 1年)
	13	水谷 寛樹	(牧野原中 1年)
	14	工藤 翼	(根木内中 1年)
	15	長田 結	(根木内中 2年)
	16	吉田 香凜	(河原塚中 1年)
	17	板橋 来美	(新松戸南中 1年)
	18	中川 和泉	(金ヶ作中 1年)
	19	本田 真樹	(和名ヶ谷中 2年)
	20	羽坂 美柚	(聖徳大学附属女子中 2年)
	21	白石 優美香	(専修大学松戸中 1年)
	22	星名 優歩	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
平成二十九年 度(二〇一七年)	1	高橋 聖奈	(第一中 2年)
	2	中木 源	(第二中 3年)
	3	見城 希音	(第三中 1年)
	4	角田 結菜	(第四中 1年)
	5	旗谷 優衣	(第四中 1年)
	6	伊藤 姫那	(第五中 1年)
	7	西田 翼	(第六中 1年)
	8	岡村 タイニー 美波	(小金中 1年)
	9	橋本 尚紀	(小金中 3年)
	10	小池 彩華	(常盤平中 2年)
	11	林 隆正	(栗ヶ沢中 1年)
	12	永野 礼華	(小金南中 2年)
	13	村田 和航	(古ヶ崎中 3年)
	14	榎田 朱里	(牧野原中 1年)
	15	北山 風香	(河原塚中 1年)
	16	スッティブン 凜	(河原塚中 1年)
	17	戸田 美智華	(新松戸南中 1年)
	18	田中 みなみ	(金ヶ作中 1年)
	19	佐藤 古都	(和名ヶ谷中 2年)
	20	松本 歌子	(和名ヶ谷中 2年)
	21	中村 葵	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	堀越 菜々	(専修大学松戸中 3年)

年度	No.	氏名	学校名
平成三十 年 度(二〇一八年)	1	並木 康輔	(第一中 1年)
	2	藤井 拓真	(第二中 2年)
	3	織田 舞衣子	(第三中 1年)
	4	安藤 聡真	(第四中 2年)
	5	林田 唯雫	(第五中 2年)
	6	南畝 亜美	(第五中 3年)
	7	高橋 ヒカル	(第六中 2年)
	8	國崎 沙和子	(小金中 2年)
	9	犬尾 まり花	(常盤平中 1年)
	10	佐瀬 綾乃	(六実中 1年)
	11	堀本 大雅	(小金南中 1年)
	12	大木 悠広	(小金南中 3年)
	13	堀越 春生	(古ヶ崎中 1年)
	14	北原 早春香	(根木内中 1年)
	15	平 水音	(河原塚中 2年)
	16	藤田 隆良	(新松戸南中 2年)
	17	小山 杏奈	(金ヶ作中 1年)
	18	森田 和佳奈	(金ヶ作中 1年)
	19	飛田 美紅	(和名ヶ谷中 1年)
	20	島岡 凜	(小金北中 1年)
	21	富田 愛夢	(小金北中 3年)
	22	関野 七海	(専修大学松戸中 2年)



年度	No.	氏名	(学校名)
令和元年度 (二〇一九年)	1	藤井 星空	(第一中 3年)
	2	新井 はるの	(第二中 3年)
	3	小川 ひなた	(第三中 2年)
	4	小島 未来	(第四中 3年)
	5	福士 莉奈	(第五中 3年)
	6	齊藤 光咲	(第六中 1年)
	7	小林 大起	(小金中 2年)
	8	小川 新九朗	(栗ヶ沢中 1年)
	9	肥田 友稀	(六実中 1年)
	10	瀬川 千寛	(小金南中 3年)
	11	相馬 理子	(古ヶ崎中 1年)
	12	高橋 柚希乃	(古ヶ崎中 2年)
	13	猪瀬 響樹	(牧野原中 3年)
	14	澁谷 亜依	(根木内中 1年)
	15	蒔野 拓朗	(河原塚中 3年)
	16	佐藤 達弥	(新松戸南中 2年)
	17	清水 啓乃介	(金ヶ作中 1年)
	18	松本 虎太郎	(和名ヶ谷中 2年)
	19	小川 陽翔	(旭町中 1年)
	20	八木原 弓賀	(小金北中 2年)
	21	西川 叶美	(聖徳大学附属女子中 2年)
	22	江本 彩乃	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和4年度 (二〇二二年)	1	田中 雅	(第一中 3年)
	2	松本 大和	(第二中 2年)
	3	高橋 拓実	(第三中 1年)
	4	西山 みなみ	(第四中 2年)
	5	武田 真央	(第五中 1年)
	6	紅田 純怜	(第六中 1年)
	7	國崎 美和子	(小金中 3年)
	8	福井 健人	(小金中 2年)
	9	臼井 絢音	(常盤平中 1年)
	10	山口 侑馬	(栗ヶ沢中 1年)
	11	佐瀬 怜奈	(六実中 2年)
	12	阿部 尚平	(小金南中 2年)
	13	中山 香乃	(古ヶ崎中 1年)
	14	岩田 大和	(牧野原中 3年)
	15	依田 千尋	(河原塚中 2年)
	16	武 茉友花	(河原塚中 3年)
	17	岡田 隼	(金ヶ作中 3年)
	18	山岡 友梨子	(金ヶ作中 1年)
	19	藤原 穂華	(和名ヶ谷中 2年)
	20	佐藤 一翔	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和5年度 (二〇二三年)	1	佐方 知樹	(第一中 1年)
	2	須志原 理奈	(第二中 2年)
	3	七條 圭都	(第三中 3年)
	4	千葉 皇毅	(第四中 1年)
	5	清水 優輝	(第五中 1年)
	6	金谷 直佳	(第六中 1年)
	7	中澤 莉沙	(第六中 1年)
	8	河村 榛己	(小金中 1年)
	9	玉木 隆太	(常盤平中 1年)
	10	平山 優奈	(栗ヶ沢中 2年)
	11	大谷 倫子	(六実中 1年)
	12	高橋 凜	(小金南中 2年)
	13	高橋 由佳梨	(古ヶ崎中 2年)
	14	吉田 心美	(河原塚中 1年)
	15	宇戸谷 茉瑚	(新松戸南中 3年)
	16	越智 海成	(金ヶ作中 3年)
	17	藤川 真莉花	(和名ヶ谷中 2年)
	18	佐藤 衿花	(和名ヶ谷中 2年)
	19	倉品 詩月	(旭町中 1年)
	20	本田 真理	(小金北中 1年)
	21	田嶋 孔賀	(光英 VERITAS 中 2年)
	22	小口 莉子	(専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名	(学校名)
令和6年度 (二〇二四年)	1	山室 里花	(第一中 1年)
	2	鈴木 瑠那	(第二中 3年)
	3	梶本 大智	(第三中 1年)
	4	岩渕 蒼生	(第四中 1年)
	5	鈴木 美羽	(第四中 2年)
	6	角本 唯	(第五中 1年)
	7	木村 花音	(第六中 1年)
	8	戸邊 杏佳	(小金中 2年)
	9	吉岡 心結	(常盤平中 1年)
	10	山口 そよ香	(栗ヶ沢中 1年)
	11	中坂 恒太	(六実中 2年)
	12	稗方 結人	(小金南中 1年)
	13	三宮 春馬	(古ヶ崎中 1年)
	14	山田 彩羽	(牧野原中 2年)
	15	武井 優衣	(河原塚中 2年)
	16	根古 紫央	(根木内中 1年)
	17	川満 英琉	(新松戸南中 2年)
	18	松本 想来	(金ヶ作中 1年)
	19	大谷 莉愛	(和名ヶ谷中 3年)
	20	吉澤 一真	(光英 VERITAS 中 2年)
	21	村瀬 麗奈美	(光英 VERITAS 中 2年)
	22	本田 彩佳	(専修大学松戸中 1年)

～ 歴代平和大使名簿(広島) ～

年度	No.	氏名	(学校名)
令和4年度(二〇二三年)	1	勝山 雪子 勝山 文子	(中部小 6年)
	2	宮内 睦海 宮内 知佳	(常盤平第二小 6年)
	3	山田 彩羽 山田 妃代	(松飛台小 6年)
	4	大谷 倫子 大谷 知美	(六実第二小 6年)
	5	中野 宙 中野 葉子	(大橋小 6年)



令和7年度
親子平和大使広島派遣事業
平和大使長崎派遣事業
報告書

飛び立とう
戦争のない青空へ

松戸市
総務部総務課

令和7年12月発行